

新 家

(その2)

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

財団法人 大阪文化財センター

新 家

(その 2)

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

財団法人 大阪文化財センター

家 條

(卷之三)

設自德軍斷天一無一田聯類日并
聯文行段密羅補發城世

一スベチ刊計文預入 入出函機



新家遺跡Ⅱ全景

口径(復元)……………23cm

器 高……………24cm

底 径……………5cm

晩期中葉、滋賀里Ⅲ式の粗製深鉢形土器。口縁部はわずかに波状を呈する。体部全体には右上り、口辺部には横位の、原体不明の条痕が残り、口辺部はさらに横ナデする。内面底部は、板状原体によるナデ調整。底部は凹み底を呈する。胎土はやや粗く、砂層中に埋もれていたため全体にやや摩耗しているが、遺存状態は良好である。



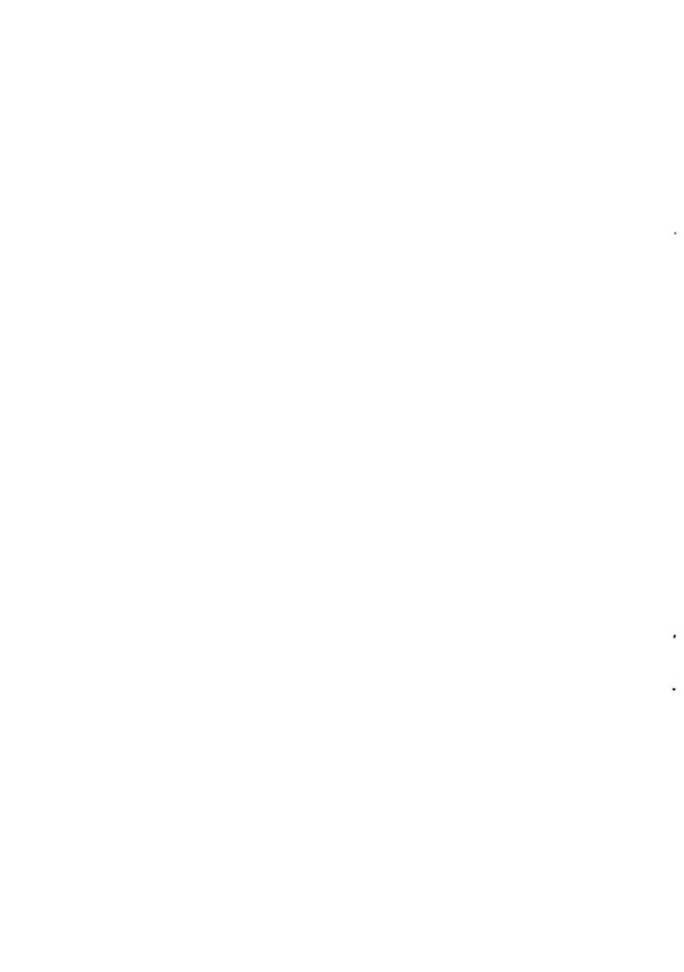
口 径……………15.5cm

器 高……………6.0cm

つまみ 径……………2.8cm

5世紀末、須恵器を模倣したと思われる土師器の蓋形土器。体部全体にナデ調整を施している。口縁端部は、外側にやや丸くふくらみ、端面には平坦面を作っている。天井部と体部の境い目の稜は表現されておらず、つまみ部は須恵器のつまみ部と完全に類似している。色調は赤白色を呈し、胎土中には粗い砂粒を混入している。





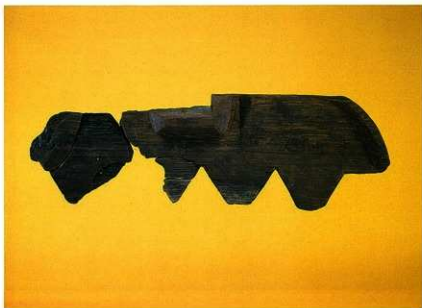
口 辺……………11.0×10.2cm
 器 高…………… 2.5cm
 底 辺…………… 6.5cm

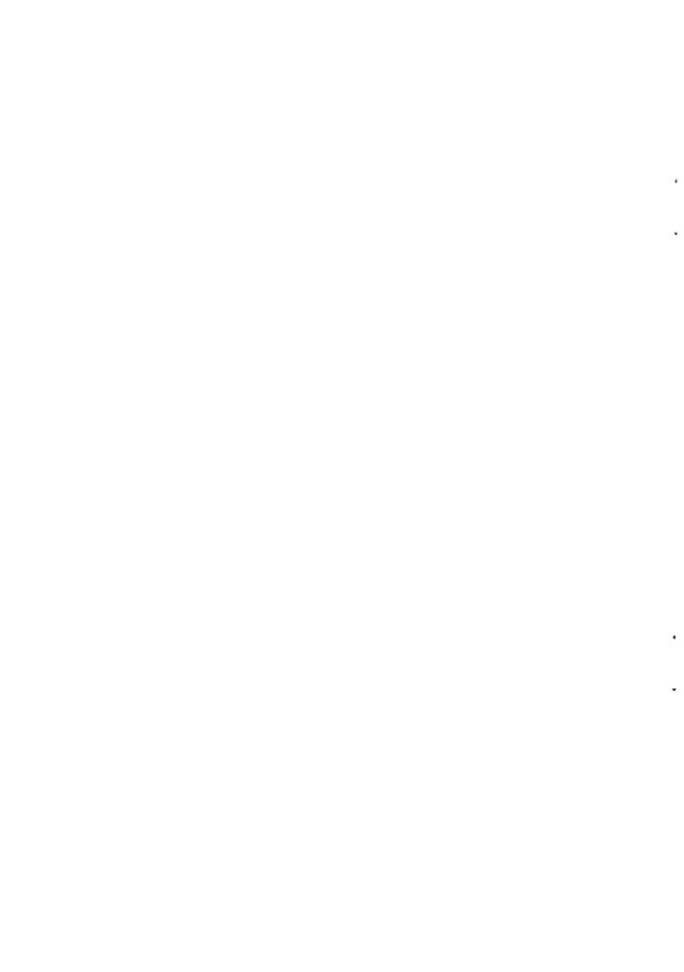
弥生時代後期の小型方形容器。10B トレンチの暗青色粘土層（VI層）中から出土した木製品。平面形は一边がやや長く、完全な正方形ではない。側面形は逆台形状を呈するが、口縁近くの外面に段を有し、やや平坦面を形づくっている。内面には、刃跡の線状痕が多数認められる。



幅 ……………40.0cm
 高 ……………13.0cm(残存)
 厚 …………… 1.0cm

古墳時代初頭の「えぶり」。9 A トレンチの流水堆積層（V層）中から出土した木製品。上半部は欠損しているが、着柄部は一部残存しており、体部より台形の高まりを1cm程度作り出す。側辺は弧状を呈し、この部分には高まりを作る。歯は4歯有し、両端は平坦で、歯を作り出さない。





殻 長……………最大3.0cm

最小0.5cm

殻 高……………最大3.0cm

最小0.5cm

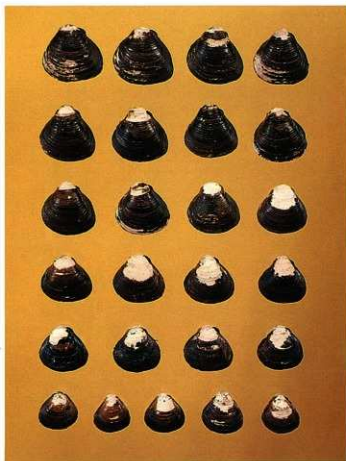
縄文時代晩期、9 A トレンチの暗灰粘土混砂粗層 (IX層)のシジミ層から出土した「セタシジミ」。前出の縄文土器出土地点より下部に位置していた。ほとんどの貝が検出時点は口を閉じていたことから生息地といえる。小さなものは洗い出し中に表面の膜がはがれ白く変化している。「セタシジミ」は「ヤマトシジミ」に比して、前縁と背縁があまり丸味を持っていない。殻頂はふくらみが強く、成長するに従い、「じん帯」の反対側～背縁の方にふくらみが片寄ってくるのが特徴である。

おの足綱

異歯目

シジミガイ科

セタシジミ



図版 7



序 文

新家遺跡は、昭和40年に建設された府道中央環状線工事中に木製の梯子が発見されたことにより、知られるようになり、意岐部小学校周辺からの弥生時代後期から平安時代にわたる遺物の採集などから昭和49年に遺跡範囲調査を実施した結果、古墳時代を中心とした集落跡遺跡であることが確認された。

本遺跡の周辺には西岩田遺跡、瓜生堂遺跡、岩田遺跡等の遺跡が所在する。本遺跡は、これら遺跡群の最北端に位置し、河内湖の変遷と集落の発展との関係を検討するのに重要な遺跡である。

この新家遺跡は、近畿自動車道天理・吹田線の建設に先立ち昭和54年から昭和56年にかけて発掘調査を実施し、その結果、試掘調査により得た成果以上に成果を上げることが出来、縄文時代晩期から平安時代にかけての集落跡であることが判明した。

本調査報告書は、前回調査を実施後、遺跡範囲の拡大ならびに、府営工業用水管の布設替えに伴い昭和57年より昭和58年にかけて実施した発掘調査の報告書である。

本調査の実施にあたっては、日本道路公団大阪建設局、財団法人大阪文化財センターをはじめ調査関係者並びに一般多数の方々のご協力、ご援助をいただいたことに深く感謝すると共に、今後とも温かいご支援を賜わるようお願い申し上げます。

昭和59年2月

大阪府教育委員会

文化財保護課長 籾内盛雄

序 文

我々は、日本の風土に適應した個有の“文化”を共有している。人間の衣・食・住を初め、技術、芸術、宗教、学問等、物心両面にわたる生活様式を“文化”と呼ぶなら、それは、各地の自然環境に大きく影響され、時に順応し、また克服しながら、時間の経過と共に形成され、発展してきたものであろう。

稲作農耕文化が定着し、発展していった弥生時代から古墳時代にかけての“河内”は“大和”と並んで日本の文化的中心地であったことは、誰しも認めるところであろう。その意味では、我々が共有する“文化”の基礎を“河内”“大和”に求めることも、また認められるのではなからうか。

弥生時代から古墳時代にかけての“河内”は、潟から湖へ、湖から平野へと、その姿を急速に変えていく中であつた。従つて自然環境は、現在より数段苛酷なものであつたであらう。その苛酷な環境の中で培われたエネルギーに、“文化”の祖型の“河内”的側面を感ずる。

本書は、昭和57年12月すべての調査が完了した東大阪市荒本西に所在する新家遺跡（その2）調査区の発掘調査の概要を記したものである。調査によって検出した遺構や遺物のすべてを本書に収録は出来なかつたが、“河内”の特殊性、特に縄文晩期から古墳時代前期にかけての自然環境の変化の激しさを読み取つていただけるものと確信するとともに、この苛酷な環境の中で生きてきた人々のエネルギーをも理解していただけるものと確信する。加えて、当該遺跡の立地する地理的環境の重要性に鑑み、考古学、歴史学のみならず、人文地理学、自然地理学を含む広汎な学問分野の研究活動に大いに寄与するものとなるであらう。

近畿自動車道天理～吹田線にかかる14遺跡の調査も、大阪府教育委員会及び日本道路公団から継続的な調査を依頼され、すでに7年、長原遺跡を初めとして、瓜生堂、巨摩鹿寺、西岩田、新家、若江北、山賀、友井東の各遺跡の調査を完了し、美園、佐堂、久空寺、亀井、城山、大堀城の各遺跡の調査を実施しており、まさにピークに達した感がある。当センターは、設立以来満10年を経過した。その間、埋蔵文化財の保護、普及活動を積極的かつ着実に実施しながら、その使命を果たしてきたと自負するものであるが、今後の調査、研究、普及活動に対して、より大きな責務を痛感している。

最後に、今後とも役職員一同、初期の目標を見失ふことなく、より一層研鑽、努力することを約すると共に、関係各位のより一層のあたたかい御理解、御支援を願つてやまない。

昭和58年5月

財団法人 大阪文化財センター

理事長 加藤 三之雄



例 言

1. 本書は、日本道路公団が進めている「近畿自動車道 天理～吹田線」に関連する工事に伴う、東大阪市党木西2、3丁目に所在する新家遺跡の発掘調査概要報告書である。関連工事とは、国道308号線から近畿自動車道、南行車線に入線する道路の掘削位置と、その後に追加された、電気室及び公団職員用の休憩室建築予定地である。
2. 今回の調査については、1979年7月～1981年3月に実施された本線部分の調査と区別するため、新家(その2)と略称することにする。
3. 新家(その2)の調査は、財団法人大阪文化財センターが、日本道路公団の委託を受けて実施した。
4. 本調査に要した費用は、139,688,000円であり、日本道路公団が負担した。
5. 調査期間は1981年10月24日～1982年11月30日である。
6. 出土遺物は、洗滌、登録、注記までは、調査箇所において出来る限り実施した。以降の整理作業については、1982年11月1日～1982年12月28日までの間、実施した。
7. 本調査は、大阪府教育委員会の行政指導を受け、財団法人大阪文化財センターが実施した。直接的な調査業務は、当初、業務課主幹兼第1係長、中西靖人のもと、村上年生が担当し、1982年6月以降追加調査に伴い、業務課第2係に移管し、第2係長、尾上 実のもと、村上年生、宮崎泰史、高橋雅子が担当した。
8. 本書に掲載した出土遺物の写真撮影は、業務第2係、平井貞子が担当した。
9. 本調査においては、以下の学生諸氏の参加、協力を得た。(大阪工業大学) 上杉明宏、(大阪商業大学) 原田久人・水谷茂哉、(大阪美術専門学校) 黒崎 修、(関西大学) 大野喜宏・林 光一、(近畿大学) 大嶋英明・高橋真理恵・高見良典・田中祥介・新田 隆・増本真治・森澤靖夫、(松蔭女子大学) 中川恵美、(樟蔭女子短大) 中西由香里、(帝塚山短大) 中西倫子、(同志社大学) 下阪泰一、(奈良大学) 小田和利・加田隆志・服部文章、(武庫川女子大) 黒崎由美、(立命館大学) 桑原真理子、(和歌山大学) 木下雅之・土生 稔・吉井裕武
本書作成のための整理作業には、大野喜宏、小田和利、桑原真理子、中西倫子、服部文章、増本真治、森澤靖夫、各氏の多大な協力があつた。
10. 本書の執筆は、中西靖人、村上年生、宮崎泰史、高橋雅子があつた。
11. 本書の編集は、村上年生が行なつた。
12. その他、縄文土器について宮野淳一(業務第1係技師)、種子について山口誠治(業務第4係技師)、図面作成の一部に関して岸本道昭(業務第2係技師)、以上各氏の協力を得た。
梶山彦太郎先生は、以前の調査から新家遺跡に関心をよせておられた。今回の調査においても現場を訪ずられ、貝類、カニ穴について、御教示を受けた。
また、外山秀一氏(立命館大学院生)の好意により、プラント・オーバールの調査を受け、結果についての原稿も執筆して戴いた。

凡 例

1. 本書の方位はすべて座標北を示す。
2. 遺構実測図の縮尺は、平面図… $\frac{1}{50}$ 、遺物出土状況… $\frac{1}{20}$ 、断面図… $\frac{1}{20}$ ・ $\frac{1}{40}$ ・ $\frac{1}{60}$ を使用した。
3. 遺物実測図の縮尺は、土器… $\frac{1}{5}$ （縄文土器）・ $\frac{1}{4}$ 、ミニチュア土器・土製品… $\frac{1}{4}$ ・ $\frac{1}{2}$ 、木製品… $\frac{1}{2}$ ・ $\frac{1}{2}$ ・ $\frac{1}{4}$ ・ $\frac{1}{6}$ 、石製品… $\frac{1}{2}$ を使用した。
4. 遺物実測図の番号は、通し番号とした。遺物記号は、土器はなし、土製品はT、石製品はSを、木製品はWを付した。なお遺物実測図と写真図版の番号は同一である。
5. 調査における座標軸は日本道路公団の設置したセンター軸を採用した。南北方向についてはSTAを、東西方向についてはセンターを基準とし、E及びWを付した。国土地理院との関係については、図2 トレンチ位置図を参照していただきたい。

目 次

I 調査に至る経過と方法

1. 調査に至る経過……………中西………… 1
2. 既往の調査……………村上………… 3
3. 調査の方法……………村上………… 5

II 調査の概要……………村上・宮崎・高橋………… 6

1. 基本層序…………… 6
2. 縄文時代晩期……………10
3. 弥生時代前期……………12
4. 弥生時代後期……………20
5. 古墳時代初頭……………26
6. 古墳時代中期……………33
7. 13B トレンチの主要な遺構……………38
8. 中・近世期……………47

III まとめにかえて ——新家遺跡の変遷概略——……………村上………… 50

付載1. シジミ層から検出した、縄文時代晩期の植物遺存体（種子）について…………山口誠治…………59

付載2. 新家遺跡におけるプラント・オパール分析……………外山秀…………63

挿 図 目 次

図 1	遺跡の位置	2
図 2	トレンチ位置図	5
図 3	各トレンチ柱状図	7
図 4	新家遺跡におけるボーリング・データ	8
図 5	河内湾の時代	9
図 6	9Aトレンチ筋掘りシジミ検出状況セクション	10
図 7	7AトレンチⅡ層 出土遺物 土器	11
図 8	8AトレンチⅡ層 出土遺物 木製品	11
図 9	弥生時代前期遺構面	12
図 10	9Bトレンチ筋掘りセクション カニ穴	12
図 11	15Bトレンチ杭跡断面	13
図 12	10Bトレンチ南壁 STA 61+52ライン	13
図 13	弥生時代前期出土遺物(1) 土器拓本	14
図 14	弥生時代前期出土遺物(2) 土器	15
図 15	弥生時代前期出土遺物(3) 土器	16
図 16	弥生時代前期出土遺物(4) 土器・土製品	17
図 17	弥生時代前期出土遺物(5) 木製品	18
図 18	弥生時代前期出土遺物(6) 石器・骨製品	19
図 19	弥生時代後期出土遺物(1) 自然河川1 土器	20
図 20	弥生時代後期出土遺物(2) 12Bトレンチ各層中 土器	21
図 21	12Bトレンチ西壁 (STA 62+08~62+13.6・62+02.4~62+08)	20・21
図 22	弥生時代後期出土遺物(3) 土器	22
図 23	12Bトレンチ遺物出土状況	22
図 24	8Aトレンチ立木検出状況	23
図 25	弥生時代後期出土遺物(4) 木製品	24
図 26	弥生時代後期出土遺物(5) 木製品	25
図 27	7Aトレンチ西壁 流水堆積層セクション	26
図 28	12Bトレンチ西壁 流水堆積層セクション	26
図 29	古墳時代初頭出土遺物(1) 流水堆積層 土器・木製品	28
図 30	古墳時代初頭出土遺物(2) 流水堆積層 木製品	29
図 31	古墳時代初頭出土遺物(3) 流水堆積層 木製品	30
図 32	古墳時代初頭出土遺物(4) 流水堆積層 木製品	31

図 33	古墳時代初頭出土遺物(5) 流水堆積層 木製品	32
図 34	9 A トレンチ遺構面	34
図 35	14 B トレンチ遺構面	35
図 36	古墳時代中期出土遺物(1) 遺構内 土器	36
図 37	古墳時代中期出土遺物(2) 第Ⅶ層 土器	36
図 38	13 B トレンチ遺構面	37
図 39	古墳時代中期出土遺物(3) 溝 9 土器	38
図 40	13 B トレンチ溝 9 遺物出土状況	39
図 41	13 B トレンチ溝 10 遺物出土状況	40
図 42	古墳時代中期出土遺物(4) 溝 10 土器	41
図 43	13 B トレンチ溝の11～13東西セクション	42
図 44	古墳時代中期出土遺物(5) 溝 13 土器	42
図 45	13 B トレンチ土坑 16 遺物出土状況	44
図 46	古墳時代中期出土遺物(6) 土坑 16 土器	45
図 47	古墳時代中期出土遺物(7) 土坑 16 土器・土製品	46
図 48	古墳時代中期出土遺物(8) 土坑 12 製壺土器写真	46
図 49	第Ⅶ層出土遺物(1) 土器	47
図 50	第Ⅶ層出土遺物(2) 瓦	48
図 51	9 B トレンチ近世遺構面	48
図 52	10 B トレンチ近世遺構面	49
図 53	新家遺跡変遷略図 (縄文時代晩期～弥生時代後期)	51・52
図 54	新家遺跡変遷略図 (古墳時代初頭～近世)	53・54

表 目 次

表 1	新家遺跡調査略年表	4
表 2	基本層序表	6
表 3	新家遺跡 (その 2) 遺構表	55
表 4	遺物一覧表	56
表 5	木製品一覧表	58

付 載 目 次

付載 1	表	同定植物遺存体一覧	60
	図版	植物遺存体拡大写真	61
付載 2	図版	プラント・オパール顕微鏡写真	62
	表	試料採取地点	63
	図 1	12B トレンチ西壁層序図	66
	図 2	ガラス・ビース法	66
	図 3	12B 西壁におけるイネ科植物生産量	67

写 真 図 版

図版 1	調査地全景	調査地全景（南から）、調査地13B～15B全景（北から）
図版 2	掘削風景	機械掘削風景、人力掘削風景
図版 3	縄文時代晩期	7 A トレンチ縄文土器、木器出土状況 9 A トレンチシジミ検出状況
図版 4	弥生時代前期①	9 B・13B トレンチ遺構面
図版 5	弥生時代前期②	10B トレンチ遺構面 11B トレンチ検出状況、自然河川川床面足跡、同東西セクション 12B トレンチ筋掘り南北セクション
図版 6	弥生時代前期③	9 B トレンチ筋掘り・カニ穴検出状況、15B トレンチ杭跡 13B トレンチ落ち込み遺物出土状況、11B トレンチ土器出土状況
図版 7	弥生時代後期①	12B トレンチ自然河川と自然堤防 12B トレンチ自然河川検出状況、掘削後、北肩部、セクション
図版 8	弥生時代後期②	12B トレンチ遺物出土状況、10B トレンチ遺物出土状況
図版 9	古墳時代初頭	8 A トレンチ立木検出状況 13B・9 A・10B トレンチ遺物出土状況
図版 10	古墳時代中期①	9 A・7 A・9 B・11B・14B トレンチ遺構面
図版 11	古墳時代中期②	13B トレンチ遺構面、同溝・土坑遺物出土状況
図版 12	古墳時代中期③	13B トレンチ土坑遺物出土状況
図版 13	近世	9 B・13B・7 A・10B トレンチ遺構面
図版 14	断面・サンプル採取地点、調査風景	
図版 15	縄文時代晩期	出土遺物①
図版 16	縄文時代晩期	出土遺物②・弥生時代前期 出土遺物①

図版 17	弥生時代前期	出土遺物②
図版 18	弥生時代前期	出土遺物③
図版 19	弥生時代前期	出土遺物④
図版 20	弥生時代前期	出土遺物⑤・弥生時代中期 出土遺物
図版 21	弥生時代後期	出土遺物①
図版 22	弥生時代後期	出土遺物②
図版 23	弥生時代後期	出土遺物③
図版 24	弥生時代後期	出土遺物④
図版 25	弥生時代後期	出土遺物⑤・古墳時代初頭 出土遺物①
図版 26	古墳時代初頭	出土遺物②
図版 27	古墳時代初頭	出土遺物③
図版 28	古墳時代初頭	出土遺物④
図版 29	古墳時代初頭	出土遺物⑤
図版 30	古墳時代初頭	出土遺物⑥
図版 31	古墳時代初頭	出土遺物⑦
図版 32	古墳時代初頭	出土遺物⑧
図版 33	古墳時代初頭	出土遺物⑨
図版 34	古墳時代中期	出土遺物①
図版 35	古墳時代中期	出土遺物②
図版 36	古墳時代中期	出土遺物③
図版 37	古墳時代中期	出土遺物④・中世 出土遺物

付 図 目 次

付図Ⅰ-a	弥生時代前期遺構面	Aトレンチ
付図Ⅰ-b	弥生時代前期遺構面	Bトレンチ
付図Ⅱ-a	弥生時代後期・古墳時代初頭遺構面	Aトレンチ
付図Ⅱ-b	弥生時代後期・古墳時代初頭遺構面	Bトレンチ
付図Ⅲ-a	古墳時代中期遺構面	Aトレンチ
付図Ⅲ-b	古墳時代中期遺構面	Bトレンチ
付図Ⅲ-c	古墳時代中期遺構面	Cトレンチ
付図Ⅳ-a	中・近世遺構面	Aトレンチ
付図Ⅳ-b	中・近世遺構面	Bトレンチ

I 調査に至る経過と方法

1. 調査に至る経過

近畿自動車道天理～吹田線にかかる新家遺跡の発掘調査は、昭和54年7月から昭和56年3月までの間、高連道路本線部分の調査を実施、縄文時代から弥生時代、古墳時代にかけての数多くの貴重な資、史料を得て終了したことは、記憶に新しいところである。

ところが、この新家遺跡の地は、日本道路公団の管理になる近畿自動車道天理～吹田線と、阪神高連道路公団の管理になる東大阪線との相互乗入れのための荒木ジャンクションの南端部分に当たり、阪神高連道路東大阪線から直接近畿自動車道天理～吹田線へ入る第3ランプの建設に伴い、本線部分東側に、さらに11基の橋脚が必要となった。

日本道路公団は、大阪府教育委員会に対して、上記の11ヶ所の橋脚位置の取り扱いについて、④大阪文化財センターを含めた連絡会議の席上協議した。これを受けた大阪府教育委員会は、11ヶ所すべてが埋蔵文化財包蔵地であることを確認するとともに、既に本線部分の調査が完了しており、遺跡の内容が、ほぼ予測されることから、橋脚部分11ヶ所については、トレンチ調査を実施することなしに、各々の予定位置について完全に調査を実施することとし、その調査も、④大阪文化財センターで行なわれたい旨、回答及び依頼をなした。こうして、昭和56年10月1日付で大阪府教育委員会、日本道路公団、④大阪文化財センターの3者は、新家遺跡（その2）発掘調査の受委託契約を締結し、④大阪文化財センターは現地に於ける発掘調査に着手したのである。

一方、上記調査が順調に進捗していくなかで、日本道路公団は、再度、荒木ジャンクションにかかる料金徴収業務員の管理事務所及び付属施設の建設、設置に関する計画を明らかにし、当該遺跡地内、本線部高架下3ヶ所を指定して、その取り扱いを大阪府教育委員会に協議した。協議を受けた大阪府教育委員会は、近畿道全体における本線部分以外の関連必要工事計画及び今後の予定を明示すること、以後、今回の様に五月雨的な協議は極力慎むことを前提条件として、3ヶ所の追加調査を実施する旨、回答した。また、この調査は④大阪文化財センターが実施している新家遺跡（その2）発掘調査契約の中で処理することとし、昭和57年4月8日付で当センターへ、設計変更、追加調査について協力を求めた。協力要請を受けた④大阪文化財センターは、上記の2つの前提条件を再確認するとともに、瓜生堂遺跡の発掘調査に着手する段階で作成した昭和58年度末を一応の目標とした5ヶ年計画の中には、こういった本線部分にかかるトレンチ部及び橋脚予定位置（切払部）以外の調査は一さい含まれていないことを強く主張し、確認を求めた上で、人員配置計画の見なおしをし、本追加分の設計変更に応じることとした。

こうして、昭和56年10月に着手した新家遺跡（その2）調査区の発掘調査は、上記の様な追加調査に伴う設計変更や、工法の一部変更についての設計変更を数回繰返し、その都度契約変更をしながら、昭和57年11月に現地における発掘調査を完了し、昭和57年12月、本書作製のための総括整理を終了した。

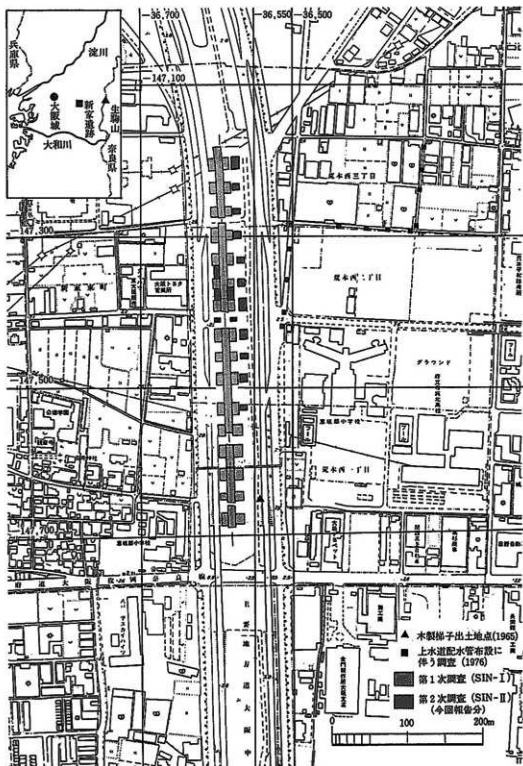


図1 遺跡の位置

<座標> 第IV座標系 (昭和42年 建設省告示 第3059号)

<高さ> 東京湾の平均海面 T.P. 0M (O.P.=+1.3M)

2. 既往の調査

<縄文時代>

1971年調査において、意岐部交差点の南側（西岩田遺跡の北側）で黒（褐）色植物包含粘土層（今回のⅧ層）の下部約1.9mのT.P. -2.88～-3.08mにおいて確認された暗灰色粘土層（今回のⅥ層）中がある。本層中に多量のセタシジミと小型の巻貝が幅15～20mにわたり検出され、弥生初期ないしそれ以前のセタシジミの生息地として示唆されている。1979～81年調査においても、セタシジミが検出され、伴って縄文時代晩期の土器が出土した。今回の結果と合わせて、縄文時代晩期中頃にあたるものといえる。

<弥生時代>

1971年調査において、暗灰色粘土層（今回のⅥ層）中T.P. -1.25mにおいて、弥生時代前期（Ⅰ様式）の小型壺形土器の出土をみている。1979～81年調査で弥生前期の自然河川・杭列・カニ穴・落ち込みなどが検出され、前期の様相が明確になった。

前述の小型壺形土器出土地点の上層においては、有機質植物粘土層（今回のⅧ層）中に葦状の植物（マコモ?）が多いことも確認されている。

弥生時代後期のものとしては、1965年出土した梯子が自然河川内のものと思われる。1974年の調査でT.P. -1m付近、暗灰色粘土層（今回のⅥ層）から、後期の鉢2点が出土している。1979～81年の調査では、自然河川・足跡・木器が検出されている。

<古墳時代>

1975年の調査において、先述の上層粘質砂から土師器の甕が出土しており、層位からみて、流木堆積層に含まれるものといえる。1979～81年において、流木堆積層の拡がりを確認している。

5世紀末頃のものとして、1971年の調査で、須恵器・土師器・滑石製の紡錘車などの出土を見しており、この時期の集落を推定している。1974年の試掘においては同時期のプライマリーな包含層が確認されている。1979～81年の調査においても、多くの遺構が見い出されており、本時期の活性化を示している。

以降は、意岐部交差点南西に位置する意岐部遺跡において、6世紀後半頃の溝・ピットが検出されているのみである。

<中・近世>

1974年の調査において、黒色土器・瓦器・瓦など歴史時代の遺物が出土しているが、今回のⅥ層の遺物の出方と類似している。1979～81年の調査で、中世に属す井戸が検出されている。1975年の調査においても、井戸が一基見い出され、磁器・瓦などの遺物の出土から近世中頃以降のものとしてされている。

以上の様に、当センターの調査以前のは調査範囲が小さいがために、数々の問題を提起したにもかかわらず、全体的な把握をするに至らなかった。当センターの調査により、新家遺跡の性格は明確になりつつある。今回の調査は、79～81年調査の追証をしたと言えよう。

表1 新家遺跡調査略年表

1940	田畑の整地作業	意岐部小学校の南側	須恵器・土師器（5～6世紀）が出土 「規矩一氏所蔵遺物」「西岩田遺跡」中央南幹線内遺跡調査会 1971
1965	中央環状線敷設工事および工業用水道管理設工事	意岐部小学校の東側 工事中の排土から	木製の梯子が出土 「瓜生堂遺跡」河内市教育委員会 1966
1971	下水管渠築造工事に伴う確認調査	中央分離帯の東側幅5mで、6・7工区の約600mにわたり確認	「中央南幹線下水管渠築造工事に伴う遺跡の調査」中央南幹線内遺跡調査会 1971
1974	近畿自動車道 天理～吹田線建設に伴う試掘調査	5×5mのトレンチを 荒木～意岐部間に4ヶ所	「近畿自動車道天理～吹田線建設予定地内瓜生堂遺跡他5遺跡第1次発掘調査報告書」当センター 1975
1975	上水道配水管布設工事に伴う調査	分離帯2ヶ所と東側市道部分に2ヶ所に立坑 8×4m（3ヶ所） 7×3m（1ヶ所） 埋設区間 500mに約50m間隔でピット11ヶ所 1.4×2m	「上水道配水管布設工事に伴う新家遺跡の調査」「調査会ニュース」№4 東大阪市遺跡保護調査会 1976
1976	上水道配水管敷設工事に伴う調査	中央環状線西側歩道部分 幅1.2mで立会調査	「上水道配水管敷設工事に伴う瓜生堂；西岩田、新家遺跡の調査」「調査会ニュース」№7 東大阪市遺跡保護調査会 1976 「上小阪・瓜生堂・新家遺跡調査報告書」東大阪市遺跡保護調査会 1976
1978	マンション建設に伴う調査	意岐部交差点南西	意岐部遺跡
1979 と 1981	近畿自動車道 天理～吹田線建設に伴う調査	分離帯内に幅10mで約450mと切掛け部32ヶ所	「新家」当センター
1981 と 1982	本調査	トレンチ14ヶ所	本概報

3. 調査の方法

〈機械掘削〉 盛土等をパワー・シャベルにより機械掘削を行い、第1遺構面は足跡面(Ⅱ層上面)として検出した。第1遺構面以下は人力掘削により各層ごとに面を検出し、調査を実施していった。

〈調査面積・最終面〉 調査範囲は、橋脚部分に各辺1mをプラスした数値と決定されている。13~15Bに関しては、以前の未調査部分にトレンチが設計された。

最終面の深度は、以前の結果に基づき設計されている。最終面の時期は、Aトレンチが縄文晩期、Bトレンチが弥生前期、C・Dトレンチが弥生中期であった。

トレンチ名称	7A	8A	9A	9B	10B	11B
トレンチ面積(m ²)	173	75	75	110	110	110
予定深度(m)	4.7	4.7	4.7	3.4	3.1	3.4
調査深度(m)	4.9	4.7	4.7	3.3	3.0	3.6
12B	13B	14B	15B	7C	8C	9C
173	125	115	134	142	79	110
4.4	3.4	3.4	3.4	2.8	2.5	2.6
4.1	3.2	3.2	3.2	3.1	3.0	3.2

〈土層観察ベルト〉 ベルトは南北方向同一ライン上に位置すべきだが、トレンチが小規模であるため、西・南側(一部北側に変更)の矢板横に「L」字形に設定した。

〈実測用基準線〉 日本道路公団が予定線上に設置している基準杭を使用している。センター軸はSTA61+28.309から北に行くにつれ西に向かい緩やかな曲線を描くが、同地点の南より軸を延長して基準線とした。

〈国土座標系〉 基準線と座標軸との関係は図を見ていただきたい。座標は第Ⅱ座標系に置き、センター軸上において、STA61+68のポイントは、「X=-147.350, Y=-36.590²⁹⁸」の座標に、STA63+68.1のポイントは「X=-147.550, Y=-36.585」の座標に位置している。センター軸はY座標軸より西へ1°43'07"振っている。

〈土壌分析用サンプル〉 花粉分析・珪藻分析のためのサンプリングを、11B(11点)・9C(15点)において実施した。今回は鑑定が間に合わず掲載出来なかった。プラント・オパール分析は、外山秀一氏の御好意により貴重な結果を頂いた。その他、種子等の採集のために、一部の土壌を水洗篩別し、縄文晩期のみ鑑定・掲載できた。

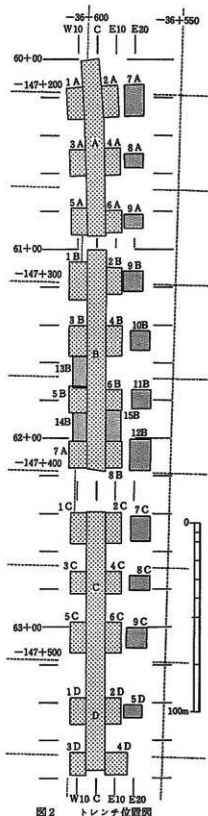


図2 トレンチ位置図

I 調査の概要

1. 基本層序

第Ⅰ層 灰青色粘土層 盛土下に旧耕土層は全面に認められず、本層となる部分が多い。青色味を強く帯びグライ化しており、中央環状線建設時までの水田土壌と考えられるもので、層厚 0.5m以上。

第Ⅱ層 褐色粗砂層 Ⅱ層上面のほぼ全坡に覆う、洪水等の影響によると考えられる粗砂層。層厚は部分により大きく変化しており、部厚いところは約30cmを有し、薄いところは数cmを残す程度である。

第Ⅲ層 黄青灰色粘土層 上面において近世の水田面を形成しており畦畔は検出され得なかったが人間と牛馬の足跡が検出されている。足跡内には、上層の褐色粗砂が入り明確に判別できるものと、青灰色のシルトが入っているものがある。全体にはフラットではなく、低い所はT.P. 0.1m、高い所は 0.9mに位置するが、平均 0.5m付近といえる。層厚0.3~0.4mを有し、中位において明瞭ではないが分層することも可能である。下部のⅢB層は鉄分を多く有し、褐色が強くなる。層中には古墳時代~歴史時代までの遺物を包含している。

表2 基本層序表

層名	時期	遺標	遺物
盛土・旧耕土	現代		
I 灰青色粘土	近世以降	溝	
II 褐色粗砂			
IIA 黄青灰色粘土	古墳以降	足跡(水田圃)・土坑 道伏遺構	須恵器・土師器 瓦器・陶器
IIB 黄青灰色粘土			
IV 砂混黒色粘土	古墳中・後期	溝・土坑・柱穴 大規模な自然流路	須恵器・土師器
VA 流水堆積層	古墳初頭		庄内式土器・木器
VB			
VI 暗青色粘土	弥生後期	足跡	弥生(V様式)土器・木器
VII 泥炭層	弥生中期	足跡or侵食による小さな凹み	
VIII 茶黒色粘土	弥生前期	杭跡・自然流路・土坑 カニ穴	弥生(I様式)土器・木器
IX 灰白色粘土			
X 暗灰色粘土			
XI 暗灰色粘土混粗砂	縄文晩期	縄文土器出土面 シジミ層	縄文土器・木器
XII 暗灰色粘土			

第Ⅵ層 砂混黒色粘土層 基本的にはT.P.±0m付近に存在すると思われる層で、7Aは-0.5mと低く、10Bは9B、11Bと比して流路状に極端に凹む。C・DトレンチはA・Bに比較して、-0.5m付近に位置し粘土化が強い。古墳中期末の包含層である。

第Ⅶ層 流水堆積層 C・Dトレンチには存在せず、沼化するため様相を異にする。古墳時代初頭の南北287mを有する自然流路により形成された堆積層で、7A・12Bにおいて腐部が検出されている。自然流路が大きく蛇行し、堆積と侵蝕を何十回となく繰り返して堆積している。層厚は、1.2mの所から0.4mの部分と大きく変化し、最終堆積の違いを現わしている。大きくは上位は粗砂で遺物は少なく、下位は粘土と微砂の互層を呈し、遺物も多く出土している。

第Ⅷ層 暗青色粘土層 レベルはT.P.-1m付近に存在する層で、11Bと8Cトレンチはやや高い。11Bトレンチは特に12Bの弥生後期の河川による自然堤防状堆積のためか高い。層厚は0.4m前後で、流水堆積による侵蝕を受けた部分は0.1m以下のところも、見い出せる。12Bトレンチについてはやや特殊であるため後述する。本層は弥生時代後期に属している。出土遺物は弥生時代後期後半から終末に属するものに限定できる。

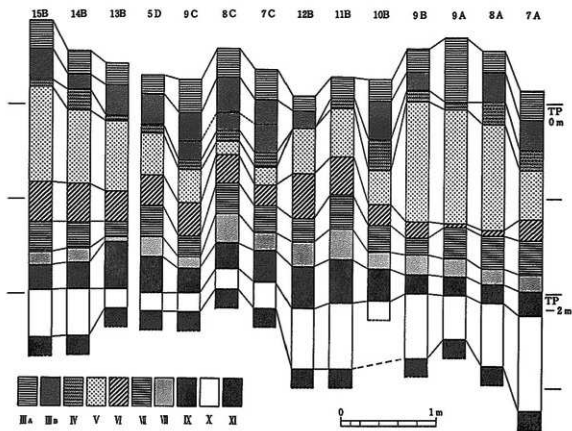
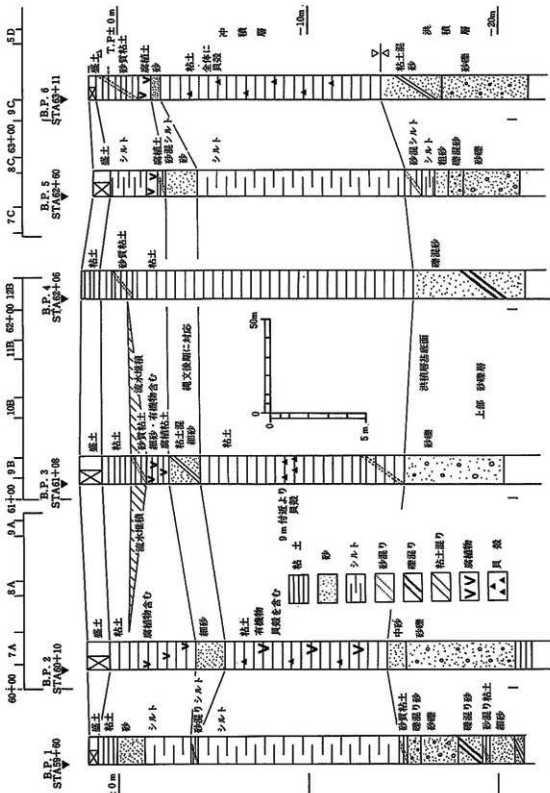


図3 各トレンチ柱状図



4 新築基礎におけるターニング・プレート

- 第Ⅳ層 泥炭土** 遺跡全体に分布し、層が明確なことから緩層となるもの。トレンチによりやや様相を異にするが、6～8の薄い層により構成されている。例として12Bトレンチの西壁においては層厚0.3～0.4mを有し、上から黒色粘土（植物遺体多し）・灰色粘土・灰黒色粘土（炭化物を全層で含む）・黒色粘土（植物遺体多し）・灰白粘土（極端に薄く1cm以下で、火山ガラス状のもの含む）・黒色粘土（植物遺体多し・灰黒色粘土・灰白色粘土と8層認められた。本層は河内湖の縁辺部の堆積物と考えられる。
- 第Ⅴ層 茶黒色粘土層** 上層直下に認められる層で、層厚20～30cmである。弥生時代前期の包含層で、遺物を多く含んでいた。
- 第Ⅵ層 灰色粘土層** 上面が弥生前期の遺構面をなす。C・DトレンチにおいてはT.P.-1.6m付近に位置し、B・Aトレンチと北に行くにつれてゆるやかに低くなっている。上面からカナ穴が切り込んでおり、内部には黒色粘土（Ⅳ層とは異なる）が入っている。
- 第Ⅶ層 暗灰色粘土層Ⅰ** 灰白色粘土層から漸移的に移行しているため、Ⅵ層とⅦ層の分離は困難であるが、Ⅵ層より灰色化が強く、粘土中に砂が混っている水性堆積物である。全くの無遺物層。
- 第Ⅷ層 暗灰色粘土混粗砂** 上面から縄文土器を抽出した、海期の扇状地堆積物であろう。砂の粒子は粗く、植物遺体も多いことから流水は強かったと思われる。層厚は30～50cm。
- 第Ⅸ層 暗灰色粘土層Ⅱ** Ⅶ層から漸移的に粘土化しており、完全な粘土層となるもので、高さはT.P.-3mに位置している。

地山層以下の層

今回の調査は第Ⅷ層を確認し（Aトレンチのみであるが）終了したが、7Aトレンチにおいて第Ⅷ層より下部の状況を知るため坪掘りを実施した。結果、1m掘削を行っても層は全く変化していないため、Ⅷ層の層厚は不明、遺物も含まない、水性の粘土層であった。本層はボーリングによる-3.0m付近に位置する層に対応すると思われる。

当地における洪積層基底面（上部砂礫層上面）は、ほぼフラットでT.P.-15mに存在した。この数値は、若江北町の楠根川付近の数値と全く変わらない。

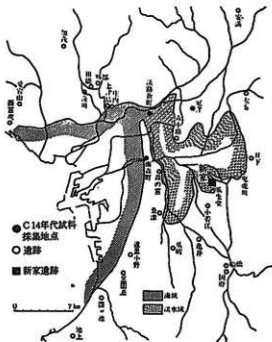


図5 河内湖の時代
(大阪市立自然史博物館「河内平野の生いたち」1972より)

2. 縄文時代

縄文時代に相当する面まで調査を実施したのは、7～9Aの3ヶ所のみである。

<シジミ層>

9Aトレンチにおいて、T.P.-2.8mでⅡ層上面を検出したが、遺構、遺物を見い出せなかった。その後、約50cm下げたところ、Ⅱ層に近くなりシジミ層を検出した。しかしほぼ予定深度であり調査の限界に達していたため、筋掘り調査によってシジミの出土状況を確認した。この状況を検討してみると、北西～南東方向に大規模な自然流路が想定される。本トレンチは北東の傾斜面にあたり、Ⅱ層上面にシジミが棲息していた、その上層には、粗砂と粘土層の互層が形成されⅡ④層、Ⅱ⑧層、Ⅱ⑩層という3層の粘土層に、シジミが棲息していた状況を示していた。

<シジミ>

私達は2カ所(60+82・E16～17、60+86・E19)でコンテナ(容積28ℓ)各2杯の土を採集した。採集土を水洗・篩別し、貝と種子を選別サンプリングした。シジミは大部分がセタシジミであるが、ごく少量ヤマトシジミが含まれていた。また貝は口を開かず、合さったままのものが多く、二枚貝が開いているものも、人間が食して廃棄したと思えず、後の影響により分離したと言えよう。

統計コンテナ4杯の中に、合さったものが100点近く、片割れを含め数百の貝を採集出来た。貝は、最大のもの3×3cm、最小のもの0.5×0.5cm以下のものが含まれ、セタシジミの棲息地であったことを示している。以前、日下貝塚出土のセタシジミの棲息地が河内湾に存在するといわれていたが、本調査により新家遺跡が棲息地であったことが判明し、まだまだ拡がって広範囲に棲息していた状況を想定させる。

<遺物出土状況>

7Aトレンチにおいて、Ⅰ層を排除しⅡ層上面を検出したところ縄文土器が散在して出土した。出土位置は、土器①(60+20・E22) 土器②(60+20・E21) 土器③(60+17・E17) 土器④(60+28・E19) 土器⑤(60+20・E22) である。すべての遺物がⅡ層上面に要付くかのように出土しておりⅡ層が形成される最終段階に流入してきた様子である。Ⅱ層は河内湾の南辺に流れ込んでいた旧大和川の支流によって形成された扇状地性堆積層で本遺跡の近くから運ばれたものであろう。

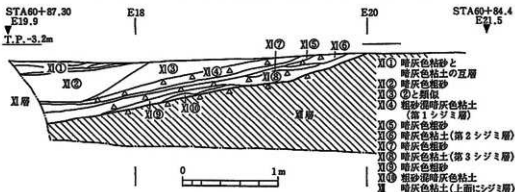


図6 9Aトレンチ筋掘りシジミ検出状況セクション

〈出土遺物〉

土器①は口縁部を、土器②は底部を有する破片で、接合し同一個体（001）であった。口縁が外反しないタイプの粗製深鉢形土器であり、多少近くを欠損するが残存状況は良い。土器③（002）は口縁部の破片で、体部に明瞭な横方向の条痕を施し、口縁部を横なでしている。005は沈線

を有する深鉢の口縁に近い部分の破片であり、体部に左上りの斜め方向の条痕を持つ。他は深鉢の体部破片ですべて外面に条痕を有している。土器はいずれも、縄文時代晩期中葉の滋賀里Ⅱ式に属する。

W01は8AトレンチⅡ層中から出土した木製品で、当初「ヤス状の木製品」と思ったが、断面が平たく茶道用の茶杓に類似している。

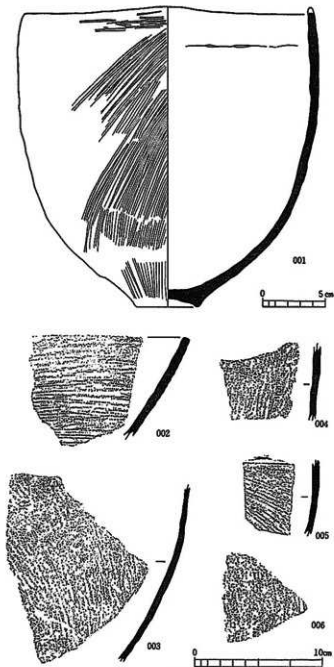


図7 7AトレンチⅡ層出土遺物 土器
001 土器①+土器② 002 土器③ 003 土器④

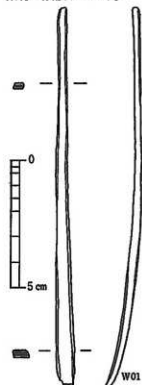


図8 8AトレンチⅡ層
出土遺物 木製品
W01 用途不明木製品 (S-36)

3. 弥生時代 前期

A、Bトレンチにおいては、本時期のⅡ層上面を調査した。C・Dトレンチ(7~9C、5D)は面の調査は実施していないが、筋掘り調査において下位の隠隠を行い、セクションでカニ穴を見出している。遺構は、杭跡14、杭列1、土坑8、落ち込み1、溝1などが検出された。

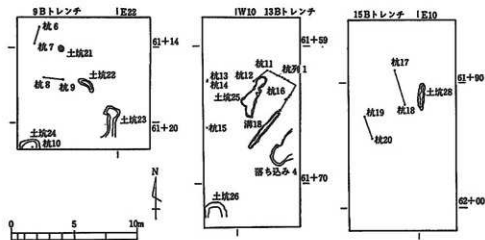


図9 弥生時代前期遺構面

<生物痕>

12Bを除き、すべてのトレンチで生物痕が存在した。生物痕はほぼ円形で、直径5cm程度の中に黒色粘土が入っている。これらの穴は上から10cmまでは垂直に行くが、それより方向を変えて屈曲しステップを造り、また下にむけて方向をかえる。深さは40cmに達する深いものもあり、掘削することは不可能であった。この生物痕は、クロベンケイガニが掘ったカニ穴と想定される。

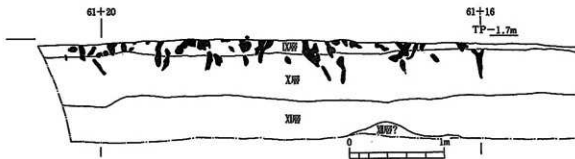


図10 9Bトレンチ筋掘りセクション カニ穴

<杭跡>

9Bにおいては5本検出され、杭間は杭6と杭7で1.4m、杭8と杭9で1.5mであった。杭6・7は以前の調査で検出されたものと繋がる可能性がある。13Bにおいても5本検出され、杭11と杭12の杭間は1.4mで、杭13と14は10cm離れるのみ、杭15は4m南に離れ、杭の直径が3本とも3cmと細く他と異なっている。杭列と呼称したものは、13Bトレンチの61+61~63、W5~

7にかけて、径6~10cm、深さ5cmを呈す小穴列で、コーナーを側溝によって欠いているが、「L」字形を成すと思われる。小穴間は約20~25cmで、北東側の辺に7、南東側の辺に4、計11か所残存している。これらはあたかも建物の此の下に残る「雨垂れ痕」に類似しているが性格が不明。15Bにおいては杭跡は14本検出され、杭間は杭17と杭18で2.8m、杭19と杭20で1.7mである。杭17と杭18の間にはもう1本存在した可能性がある。

以前の調査においては、杭が建物の柱の様に配置していたが、本調査においては2本が並ぶのみで構造物を想定することも困難な状況であった。

<土坑>

土坑は8基検出され、不整形なものが多く、9Bと14Bの土坑が隅円方形状を呈していた。形状、大きさなどは様々で、深さは5cm程度のもが多く、一番深いもので30cmである。埋土は炭が混っているが、上層(X層)の茶黒色粘土が入っており、土坑内出土の遺物とⅠ層出土の遺物が接合した例がある。9Bの土坑23・24、14Bの土坑27内から若干の弥生前期の土器が出土している。人為的に掘削された可能性をあまり持ち得ていない。

<溝>

13Bにおいて検出した、長さ3.65m、幅0.4m、深さ0.05mの溝状遺構である。北東-南西方向に走っており、埋土は土坑と類似する。溝内から、若干の弥生土器片が出土している。

<落ち込み>

13Bにおいて検出した、長さ2m以上、幅2m以上、深さ0.2mの不整形な落ち込みである。埋土は土坑と類似するが、内部から、弥生前期の鉢、甕などの遺物が出土している。

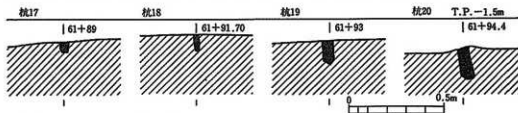


図11 15Bトレンチ杭跡断面

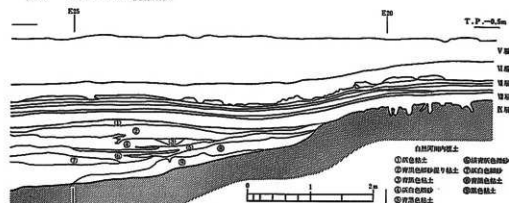


図12 10Bトレンチ南壁 STA 61+52ライン

＜自然河川＞

8A・10B・11B・12Bにおいて検出した河川で、同一の流れといえる。Cトレンチにおいては認められず、12Bにおいて北北東-南南西方向の東壁が検出された。河川は11B・10Bに見られるように南北方向に流れをかえ、9B・9Aでは検出されず、東に寄り、8Aでは北西-南東方向に急激に方向をかえる。河川の幅は10m以上と思われ、断面を観察すれば人為性を認められず自然河川と称すこととした。自然河川層部付近には生物痕が検出できる(図12)。

＜遺物＞

弥生時代前期面であるⅤ層上面において、遺構内から遺物が出土している。特に9Bの土坑23と13Bの落ち込み4から多くの遺物が出土している。また、遺構面直上に覆層(茶黑色粘土層)が30cmの厚さで形成されており、層中に遺物が多く入っていた。以下に遺物を掲載する。

土器では、壺形土器、鉢形土器、甕形土器の他にミニチュア土器、土製円板がある。壺形土器(011)は広く短い口頸部をもち、端部には面がある。無文。鉢形土器(013)は口縁部が短く外反し底部は上げ底。口縁下には沈線文を施し、文様の上下、中央部分に太い沈線文を付加する。沈線文下には三角形押型文を2帯施し、その下にもう1本太い沈線文を加えている。甕は、口径20cm前後から30cmを越す大型のものまで揃っており、口径が腹径を上回るものが大半である。口縁端部には刻み目を施したのものもあるが、無文が多い。017は口縁端部に刻み目、頸部に沈線文があり、底部はやや上げ底で中央部に焼成前の穿孔がある。外面は別毛目調整後、下半を寛磨き調整する。内面はナゲ調整。以上、文様は沈線文を主体とし、図13に示すとおり各器種に施される。甕形土器では無文或いは口縁部に刻み目だけを施したものが多くみられる。

木弓(W04)は、弓身の中程で折損し、現存長36.5cmを測る。弓身は断面円形のままで表面を加工せずに用い、弓弭付近は内側を削って断面半円形につくる。弓身は若干の彎曲がみられる。弓弭は、弓弭頭の両側面を削り落し、突起を作り出す。W05も同一層の出土と考えられ、弓身のみが残る。木杭(W02・W03)は図11の断面に見られるように、先端部が尖らず平坦に近いものが多い。他に用途不明木製品(W06)が出土した。石器は製品として、石鏃3点(凹基式・凸基有茎式)・不定形刃器2点・石砲丁(内彎刃)1点がある。石材はサヌカイトおよび緑色片岩(石砲丁のみ)である。加工骨片(B01)は剣刃を研磨するが用途不明、加工木片(W07)は覆層から出た唯一の遺物で弥生時代中期に属するもの。土器調整用具の「ハケの原体」と推定している。

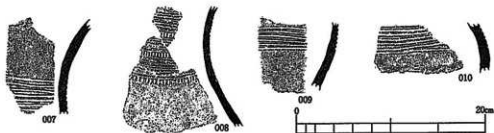
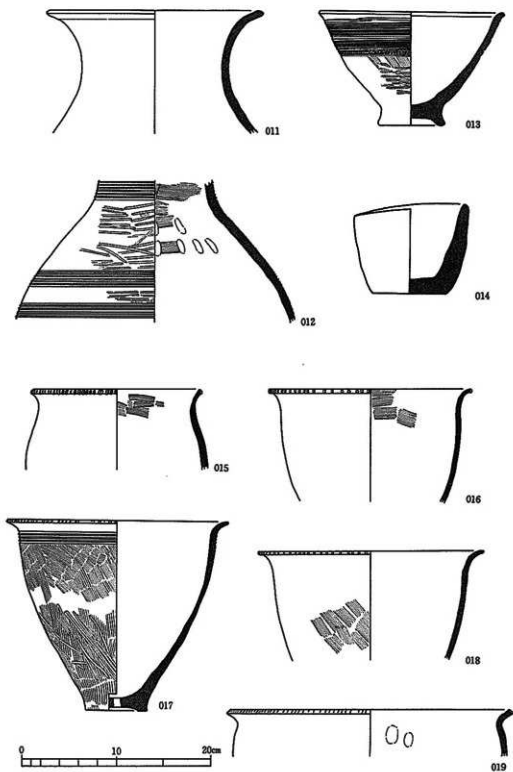


図13 弥生時代前期出土遺物(1) 土器拓本



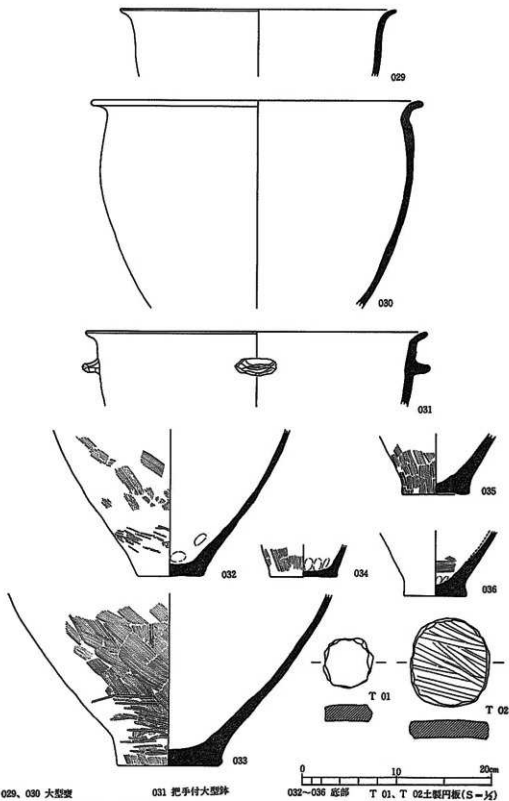
011、012 広口壺 013 鉢 014 ミニチュア(S-J) 015-019 刻目を有する壺

図14 弥生時代前期出土遺物(2) 土器



無文の甕

图15 弥生時代前期出土遺物(3) 土器



029、030 大型鉢

031 把手付大型鉢

032-036 底部 T 01、T 02土板円板(S=1/2)

図16 弥生時代前期出土遺物(4) 土器・土製品

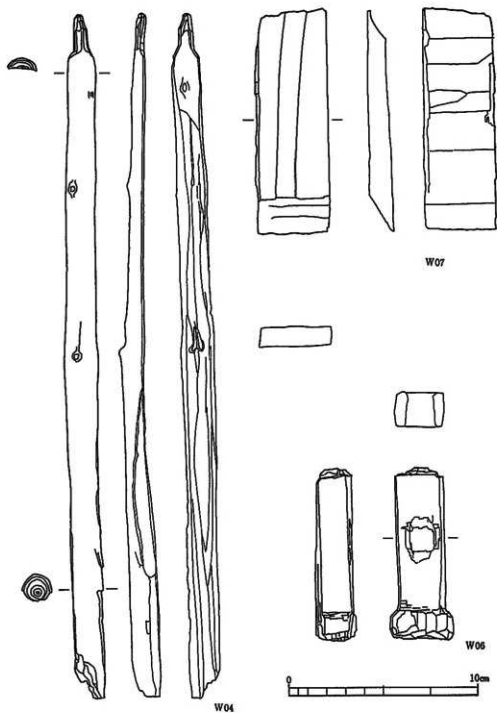


图17 弥生时代前期出土遺物(5) 木製品
 W04 木弓 W06 用途不明木製品 W07 加工木片 (全S-4)

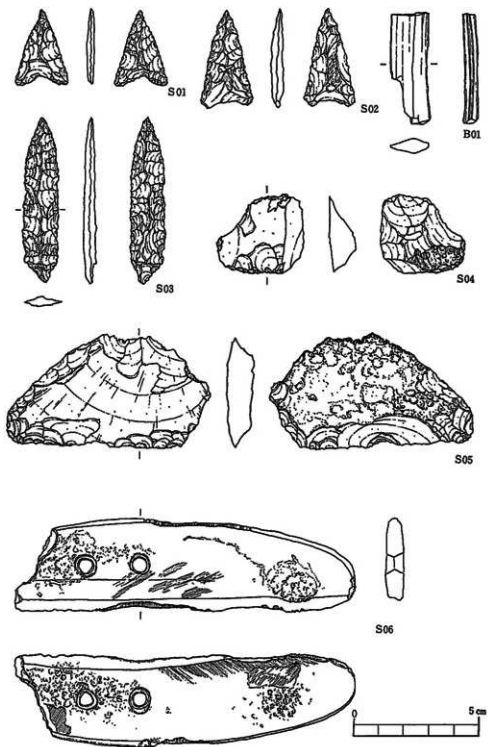


図18 弥生時代前期出土遺物(6) 石器・骨製品

4. 弥生時代 後期

弥生時代中期に対応するビート層（Ⅶ層）が存在するが、ビート層中には遺物が全く含まれておらず、遺構も認められない。ビート層直上には、暗青色粘土層（Ⅷ層）が堆積している。基本的には各トレンチにおいて同一傾向を示すが、12Bトレンチのみ異なっている。本時期の遺構としては、自然河川が1条存在し、14・15Bにおいては足跡状のものが認められた。

<12Bトレンチ堆積状況>

12Bトレンチにおいてのみ、Ⅶ層が2層に分割される。ビート層上面・Ⅶ・B層下部から、後期後半に属する047と048と049の遺物が出土し、自然石を数個付近に伴っていた。そしてⅦ・B層が、河川の肩付近で50cm、トレンチ北側で20cmと、様相を異にして堆積する。この層は、自然河川の肩部では青灰色粘土と青灰色微砂の10cm以下の互層を呈し、河川が形成した小規模の自然堤防といえよう。トレンチの北に行くにつれ、互層化は弱くなるとともに粘土化が進み、他

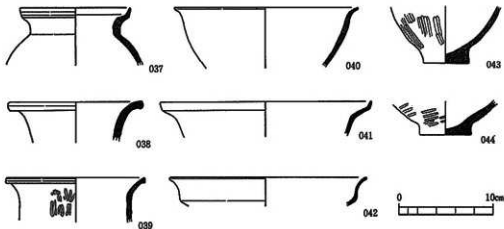


図19 弥生時代後期出土遺物(1) 自然河川1 土器

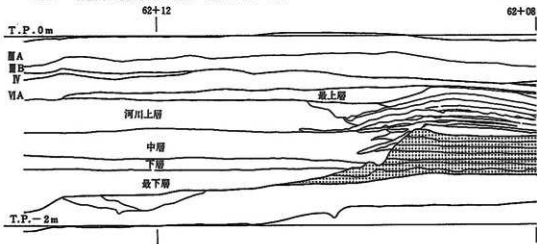


図21 12Bトレンチ西壁 (STA 62+08~62+13.6)

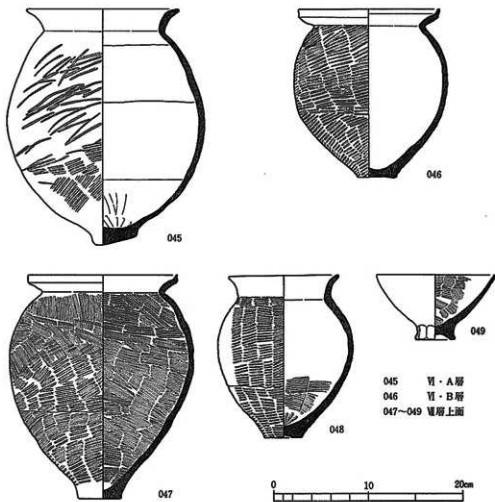


図20 弥生時代後期出土遺物(2) 12B トレンテ各層中 土器

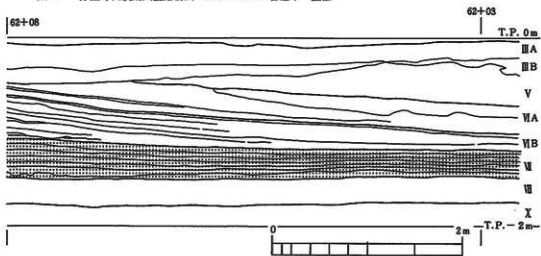


図21 12B トレンテ西壁 (S T A 62+02.4~62+08)

のトレンチに類似してくる。このことは、自然堤防の背後に形成される湿地的様相を示しているが、水成堆積層と言うべきものであろう。各トレンチにおいて見られるⅥ層と対応している。

Ⅵ・A層は黒色化しており、他のトレンチでは認められない。本層は河川が埋没した後に、堆積した層というべきものである。そのため、流水堆積の下部に存在する暗背黒色粘微砂層に対応するかと考えたが、粘土化が強いため、弥生後期の粘土層としてとらえた。本層から弥生時代後期終末に属す土器（045）と木器（W13～W17）が出土している。木器の出土状況（図23）に見られるように、流水堆積層と区別は明瞭で沼状地域に定着した木器といえる。

<自然河川>

12Bトレンチは東西方向に横切る自然河川で、現存幅 8.0m、深さ 1m を有する。肩部は自然堤防状堆積をくり返すため、鋸歯状を呈する。河川の埋土は、最下層（褐色砂礫）、下層（褐色粗砂）、中層（褐色砂礫）、上層（茶褐色砂礫）であった。自然堤防は中層堆積時に形成を開始したが、あまり進まず、上層堆積時の深さ 0.3m の時期に、オーバーフローが激しかったため自然堤防を形成したと言える。遺物はほとんど最下層から出土した。土器（037～042）は北壁側の下地付近に分布するものが多く、中央部の木器の周辺からも一部出土している。河川中央部の川床上面における木器群からは、木製高杯の脚部破片（W09）と棒状木、杭、自然木などが出土している。その他には、杭が北壁下端に平行するよう出土している、これは水流により壁側に打ち寄せられてきたものが沈着した様相を示している。

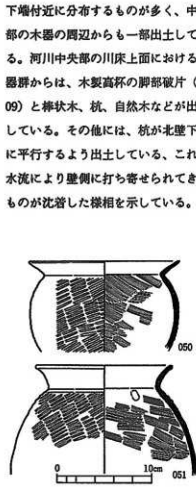


図22 弥生時代後期出土遺物(3) 土器

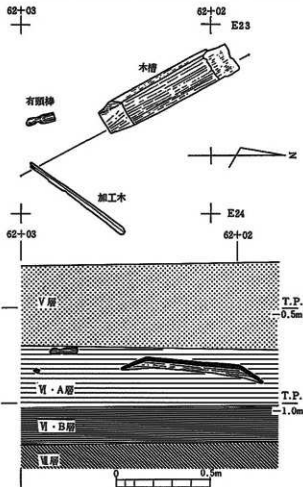


図23 12Bトレンチ遺物出土状況

〈立木〉

8 A トレンチにおいては、Ⅱ層上面の粘土面において立木が18本検出された。これらは約10cm以下の小灌木であり、本粘土面が陸地化したことを証明するかもしれない。これは、一部のトレンチにおいて足跡が検出したことからいえよう。

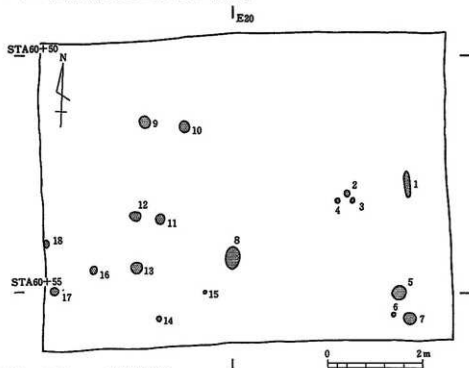


図24 8 A トレンチ立木検出状況

〈遺物〉

自然河川1出土 壺形土器 (037、038、039)、鉢形土器 (040、041)、高杯形土器 (042) などがある。小破片で磨滅しており、残存状況はあまり良好ではない。

木製高杯 (W09) は脚部が残存する。柱状部は傾く。脚部端及び裏面の破損が著しく、高杯木米の形、脚部裏面の凹みの形は推定し難い。

Ⅱ・A層出土 壺形土器 (045) は、体部の張り下方にある。外面の調整は体部の上半から中位までの叩き目をナゲ消した後、荒磨き状の乱雑な調整が斜め方向に加えられる。全体に粗雑な作りで、新しい傾向をもつものと考えられる。

木器は、木槽 (W17)、布巻具 (W10) の他に、用途不明木製品も多く出土している。木槽は、口縁部の角が残っておらず、底部の形態から平面形が隅四方形を呈したものと考えられる。約1/2が残存する。底部には『コ』字状の低い脚台を2ヶ所作り出す。布巻具は、両端に頭を残し、中央部分を削ったものである。一面は平坦で中央部は断面カマボコ型を呈す。W11は、厚さ約1cmの板の端部を切込んで突起を作り出したもので、突起が2ヶ所残る。一面には長辺に沿って溝が彫り込まれている。他の部材と組み合わせたものと考えられ、琴の可能性もある。有頭棒状木製品

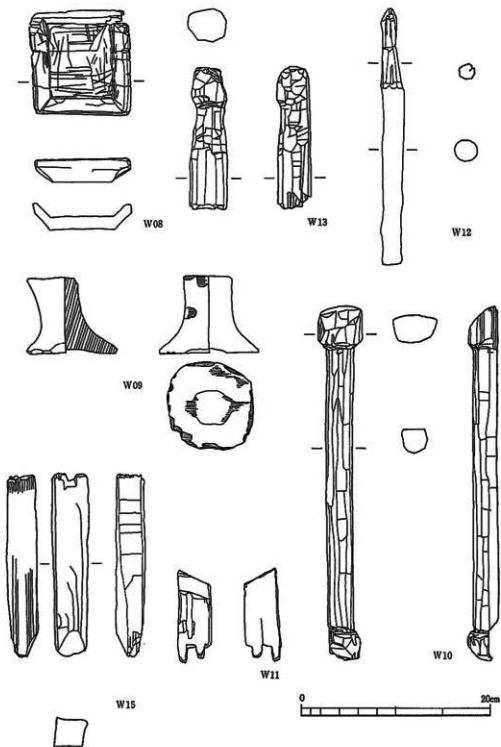


图25 张生时代后期出土遗物(4) 木製品
 W08 小型方形簋 W09 木製高杯 W10 布卷具 W11 棒状木製品 W12·13 有頭棒
 W15 角材 (全S-1/4)

(W12、W13)は一端のみ残る。周囲より削って頭を作り出す。W12は心持材で表皮を残す。W13は裏面に平坦面があるが欠損によるものか。他にこの層より、角材(W15)、木杭(W16)などが出土している。W15は上部に枘穴があり、その部分で折損している。

Ⅱ・B層出土 変形土器(046)は、受口状口縁をもち、体部上半と下半では叩き目の方向が変る。底部中央はわずかに凹む。図23の変形土器(050、051)も他トレンチ(13B、14B)の同一層からの出土である。

Ⅱ層上面出土 変形土器(047、048)、鉢形土器(049)がある。047はややつまみ上げられた口縁をもち、肩の張る体部である。底部は平底。調整は、外面を屈曲部以下約 $\frac{1}{4}$ の叩き目を刷毛目で消す。内面は横方向の刷毛目調整を全面に施す。048は、口縁部が斜め上方に外反して開く。屈曲部は緩やか。底部中央は凹む。049は底部からやや内傾して立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部には凹凸を残し、内面の調整も口縁端まで及び。上げ底で、底体部外面には指圧痕を残す。

木器では、方形盤(W08)、丸棒(W14)がある。方形盤は1辺がほぼ10cmを測る。口縁部の上端には面があり、また側面の左右2方には段がある。底部は平坦で、内外とも口縁部と底部の境は明瞭である。底部内面の側面に近い部分には加工痕が残る。側面の接点には4ヶ所に面取りがある。丸棒は両端が欠損し、一方にややふくらみをもつ。柄とも考えられる。

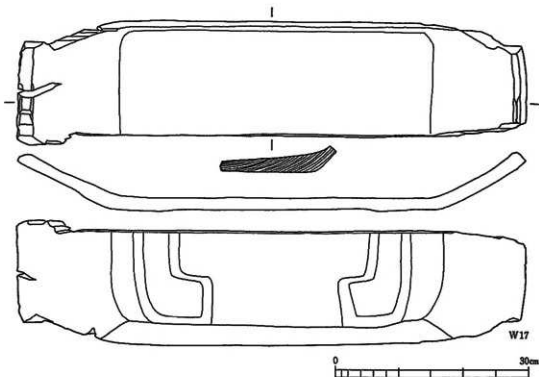


図26 弥生時代後期出土遺物(5) 木製品
W17 木槽 (S-36)

5. 古墳時代 初頭

古墳時代初頭（庄内式土器併行期）は、大規模な自然流路が遺跡内に流入して来るため、砂層を基本とする流水堆積層が形成される。流路はほぼ東—西方向に流れ、北端は7Aトレンチ（図27）に有り、南端は12Bトレンチ（図28）に検出された。このことから、流路の幅は287mを有し、A・Bの各トレンチにおいて流水堆積層が存在していた。流水堆積層は深いところでは約1m、浅いところでは約0.5mであった。堆積状況は、大規模な流入と小規模の流入をたえず繰り返し、急激な堆積・緩やかな堆積により、幾度と切り合いが行われ、複雑な波状の堆積状況を示している。南北幅287mの間に、小流路が幾本も流れ込んで来ていたことを表現していた。7Aトレンチの北層においては、緩やかに上がるが途中で削平を受けた後に、Ⅱ層が堆積している。12Bトレンチの南層についても緩やかな傾斜面を形成している。

遺物の出土状況は、土器はほとんどのものが、流水堆積層の下位とⅡ層上面に接するように出土する。木器についても土器の出土状態とはほぼ同様で、Ⅱ層上面の接するものが多く、もしくは下位の暗青黒粘土と微砂の互層中から多く出土している。

C、Dトレンチは本時期のみ様相が異なり、沼地化している。流水堆積層（Ⅴ層）に対応する暗灰色粘土（C、DのⅤ層）が堆積しており、粘土層中には白い「カルシューム塊」が点々と分布していた。

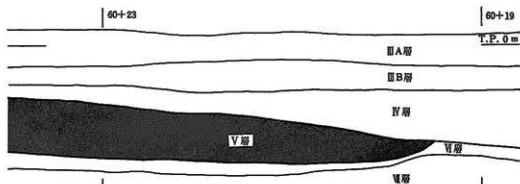


図27 7Aトレンチ西壁 流水堆積層セクション

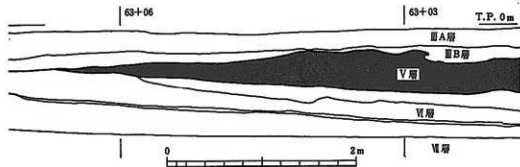


図28 12Bトレンチ西壁 流水堆積層セクション

〈遺物〉

土器 高杯形土器(052)、甍形土器(053~059)がある。酒津式甕(054)は体部より丸みをもって外反し、更に立ち上がる口縁部で、端部には栴插平行文を施す。054の体部はやや裾すばまりで、丸底に近いが平坦部をわずかに残す。外面の調整は、肩部は縦方向の刷毛目、体部下半には篋磨きを暗文状に施す。内面は底部を除き屈曲部まで篋削りし、底部には指圧痕が残る。外面の肩部には、栴插の原体による圧痕がある。055の口縁端部外面に、赤彩が2ヶ所認められる。

木器 農具、容器の他に、用途不明木製品、加工木が多く出土している。

円形盤(W18)は、直径が復元値で約50cm。高さ約8cm。口縁部は、周縁に幅4cm前後の面を残して垂直に下げ、面をつくって内面と区画する。底部も円形で平坦。底部外面に加工痕が良く残る。側面は彎曲して立ち上がり、口縁部外面には、幅2.5cmのやや内傾する面がある。えぶり(W19)は着柄部の一部を残し、上半部が欠損する。着柄部には台形に突起を残す。側辺は弧状で、側辺に沿って底面の幅約2cmの高まりがある。表面、特に着柄部の周囲に加工痕が残る。下面には着柄部の中央に凹みがあり、くさびの跡と考えられ、柄を固定したものであろう。ナスビ形着柄縄(W20)は、身の左片方の先端のみ残存する。先端は若干の磨滅が認められる。アカカキ(W22)は柄と身の約1/3および側縁の壁が欠損する。側縁は垂直に立ち上がるものと思われる。底は丸い。櫛状木製品(W21)は、扁平な細長い木製品である。身の先端、柄の先端が欠損する。柄から身へなだらかに移行する。柄は厚い。有頭棒状木製品は、両端に頭を作り出したものである。全長は58~60cmを測る。製作方法として、丸木をそのまま使ったもの、半截したものがあつる。W26は、丸木の表面を軽く削り、頭部も周囲より削る。端部は斜めに切断する。W24、W25、W27は半截木を用いる。表皮が残る部分もあり、加工されていないものと思われる。両側面或いは裏面から削って頭を作り出す。W24は、頭部も側面から削って細くする。W23は、全長20.1cmで、頭部は周囲から、先端は2方向から削る。片面の中央部分には抉りがある。この抉りは指掛けと考えられ、握棒としての機能が考えられる。W30は断面半月形の木製品で、両端をほぼ同じ角度に切断する。上部には納穴があり、栓が埋め込まれた状態で出土した。裏面は下端部に突起を約8cm残し平坦に削られるが、その突起部は欠損する。栓は表が太く、裏面に細い。W31は、厚さ約4cmの薄い板で、左右端は厚さ1.5~2mmと薄くなる。上下端には切断痕が残る。数ヶ所に穿孔がある。W43は丸木の表面をやや扁平に削り、先端は2方向から加工する。裏面は欠損。頭部は細かく周囲から削っており、中心に柄の痕跡と考えられる破損部がある。また、表面の中央部には稜線の不明瞭な部分があり、使用によるものかどうかは不明だが、槌の一種とも考えられる。W42は同様の加工がみられるが、頭部は切断される。W28は断面カマボコ型で表面に加工痕が残る。板材(W32~W37)のうち、W32を除き1~4ヶ所の納穴ないしは抉りがある。W36は納穴の1つに板材の樹皮が残っている。W29は全面を加工する。

以上の他に、先端或いは表面を若干加工した杭頭(W38、W39、W41、W44)、角材(W40、W46)がある。W45は断面カマボコ型で一方に納が作り出される。

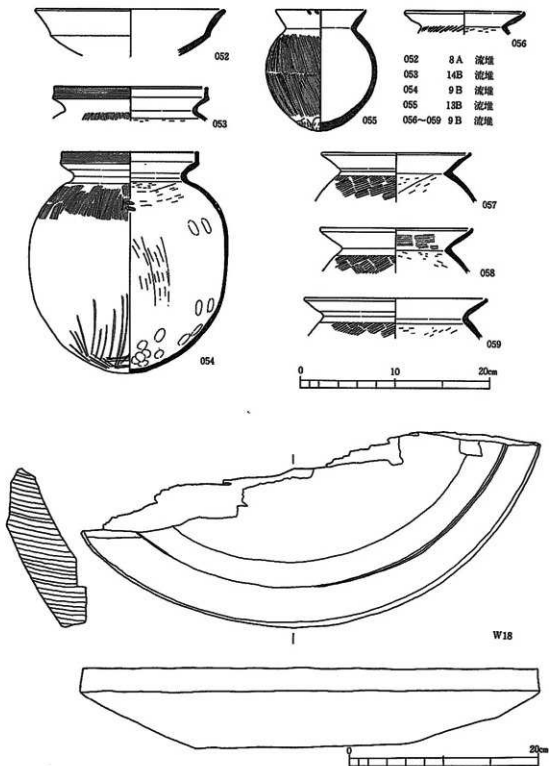


图29 古坟时代初頭出土遺物(1) 流水堆積層 土器・木製品
W18 円形盤 (S=34)

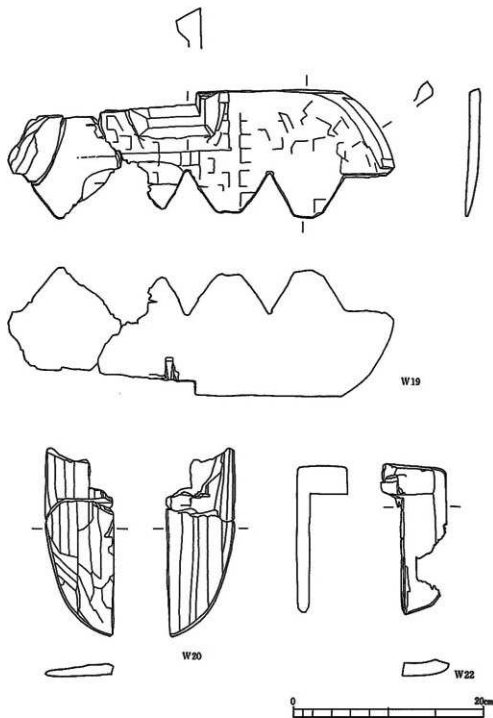


図30 古墳時代初頭出土遺物② 流水堆積層 木製品
 W19 えぶり W20 ナスビ形箭鏃(二又鏃先のみ) W22 アカカキ (全S-14)

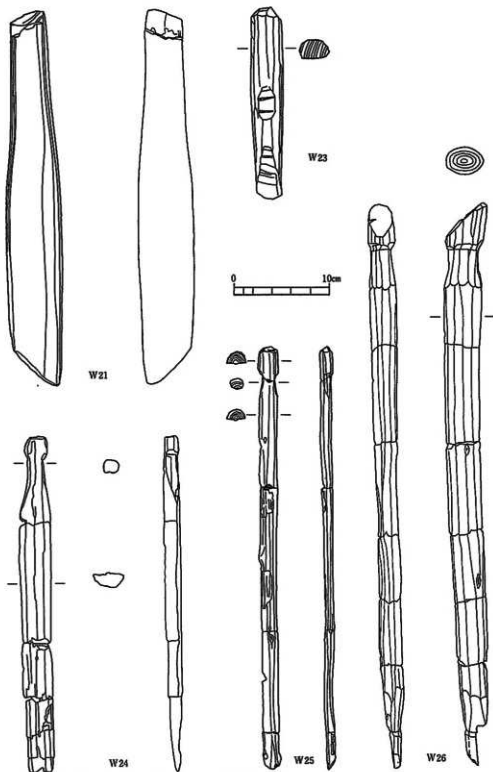


图31 古墳時代初頭出土遺物(3) 沓水堆積層 木製品
 W21 細状木製品 W23 指棒 W24 有頭棒 W25 有頭棒 (S=1/4) W26 有頭棒
 (W25を除きS=1/4)

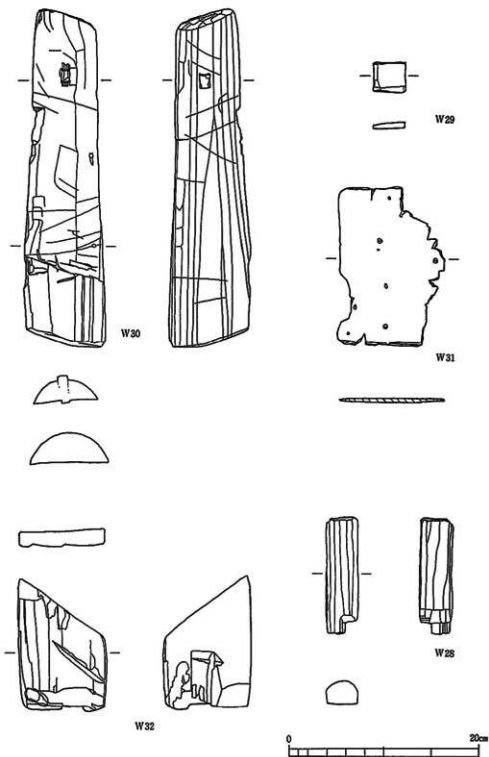


図32 古墳時代初頭出土遺物(4) 流水堆積層 木製品
 W28 用途不明木製品 W29 加工木片 (S-14) W30 用途不明木製品
 W31 用途不明木製品 一有孔薄板一 W32 板材 (W29を除き S-14)

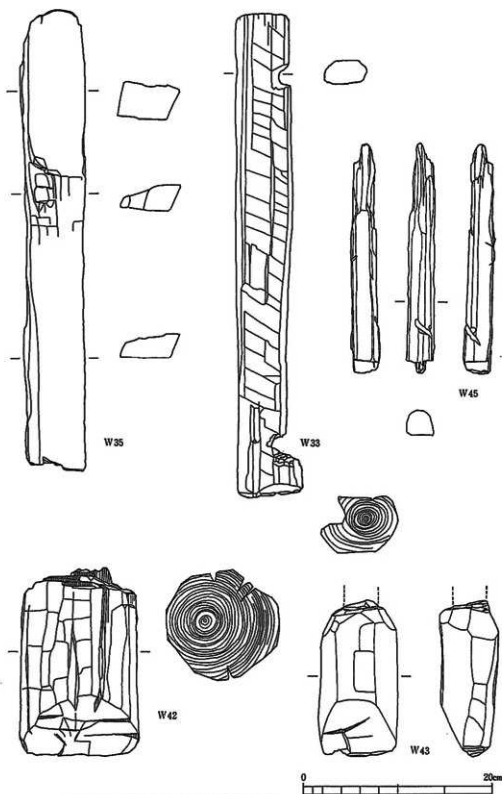


图33 古墳時代初頭出土遺物⑤ 流木堆積層 木製品
 W33・35 板材 W42・43 用途不明木製品 W45 棒材 (全S-14)

6. 古墳時代 中期

古墳時代初頭の流水堆積層上面において、古墳時代中期の多くの遺構が検出された。本期の遺構の切り込み面は、本来もう少し上位に存在したと思われる。遺構面直上には、砂混り黒色粘土層（第Ⅶ層）が覆っているが、層厚は一定せず、本層が存在しない部分も認められた。

本期の遺構は、A、B各トレンチ（12Bトレンチを除く）から検出されているが、流水堆積によって運ばれた砂礫により敬高地が形成されたことで、居住条件が整い遺跡の拡大が進行したといえよう。

	7A	8A	9A	9B	10B	11B	13B	14B	15B
溝		4	1			2	6	1	3
小溝	10								
土坑	1			4			8		4
Pit	24	4	23	14	7	11	3	8	6
落ち込み					1	1	1		

7Aトレンチにおいては、南半部の流水堆積砂層上面において遺構を検出したが、北半部については遺構が削平されていた。土坑6は長楕円形で、深さ0.7mの水溜め状の性格と思われ、南側に小溝が切られており、連結していた。ピットも数多く見出されたが、浅いものが多く柱穴とするには不可能であった。

8Aは4本の溝が合流した状況を呈していたが、層部の線は不整形で自然小流路かもしれない。

9Aは溝が1条とピットが23検出された。ピットは方形の掘方を有し、柱の痕跡が認められ掘立柱建物の可能性が考えられた。ピット51～54までの4本については、柱間が1.8mではほぼ等間隔であったが、南北に対応するピットが無く南側溝中に存在したかもしれない。その他、様々な組み合わせについて想定したが、無理に建物を推定しなかった。

9Bでは直接2.2mの円形土坑が存在し、東側においても円形土坑の一部を検出しており、これらは茶掘りの井戸状施設というべきものかもしれない。

10Bは北東コーナーに落ち込みが認められ、中央部分に小ピットが散在している。

11Bの東側において検出した溝状を呈する落ち込み3からは須恵器の杯身と土師器の羽釜が出土した。落ち込み内の埋土は、直上に堆積していた第Ⅶ層に類似する。

13Bトレンチの主要な遺構については後述するが、溝9・溝10は79～81年の調査の成果から見て、Bトレンチで検出される大溝と同一遺構である可能性が高い。また溝13は5Bトレンチの溝と繋がりがあがる。溝と土坑は切合い関係が認められるが、溝が埋没した後に、土坑が設けられたことは明確である。しかし遺物から見ると、両者間の時期差はほとんどないといえよう。

14Bトレンチにおいて特徴的なことは、70数カ所の小ピットが存在していたことで、2カ所においてピット列を形成する。方向は、西北西—東南東に位置しており、ピット間は一定した間隔ではない。小ピットは、径10～20cmまでのものが多く、深さも、5cm程度の浅いもので、枕列と

もいえず性格については不明。南端に見られる溝14は、幅 1.0m以上で深さ 0.2mの浅いものであるが、須恵器の杯身が出土している。

15B トレンチにおける土坑18は、直径 4 mの円形のもので、深さは 0.5mを有し、簡易な水溜め施設が想定されよう。

C トレンチの状況は、古墳時代初頭における沼地化が終了し、古墳時代中～後期の包含層が覆いかぶさって来る。対応する第Ⅱ層は、砂が混らない黒色粘土層である。

このように古墳時代初頭における流水堆積が、本遺跡における自然堤防の形成を促した。その結果が本期の多数の遺構に表現されている。特に環境としては湿潤な状況にあったことから、排水を常に念頭に置いたと言えよう。そのために多数の溝が施設されたことが想定される。居住区域は「STA60+50～62+00」の範囲において柱穴・ピットが多く検出されることから、この150mを中心とした集落が想定される。

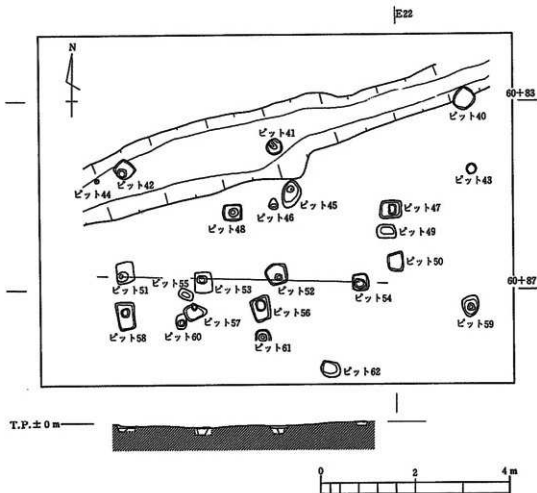


図34 9A トレンチ遺構面

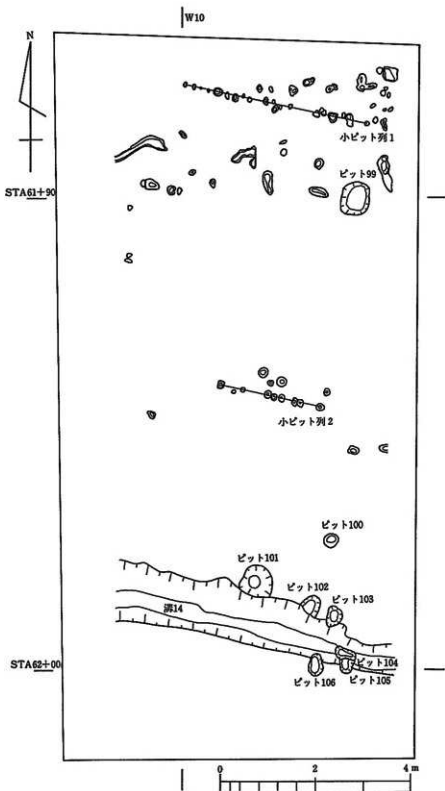


図35 14Bトレンチ遺構面

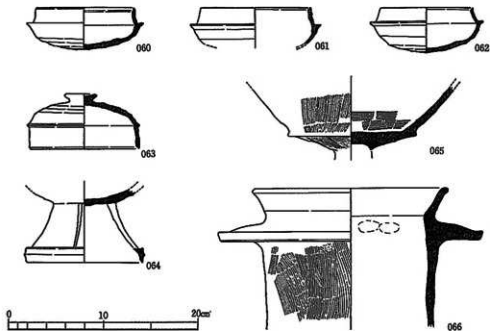


図36 古墳時代中期出土遺物(1) 遺構内 土器

<遺物>

各遺構および遺構面を覆う第Ⅶ層から遺物が出土している。

須恵器の杯身(060)は、立ち上がりが内傾し更に直立する。端部には段がある。羽釜(066)は、口縁部が屈曲して外反し、端部はやや内傾する。鈎は幅が広く、外端には面をもつ。体部はやや摺すばまりの筒状である。外面の刷毛目調整は鈎の下面にも及ぶ。胎土中には角閃石を含み、色調は茶褐色を呈す。以上は11Bトレンチ落ち込み3出土。061は13Bトレンチの溝9、10出土の接合遺物である。062は14Bトレンチ溝14出土。063は、口縁部が直下になり、端部には段がある。高杯脚(064)は、脚幅径が12.1cmと大型である。脚は『八』の字形にゆるやかに開く。脚端部には凸線がめぐり、三方にスカシがある。063、064は13Bトレンチ土坑29出土。なお、13Bトレンチ出土の他の遺物については後述する。

第Ⅶ層中の遺物には、遺構出土の遺物よりやや時期の下がるものがある。他に土師器も含まれる。

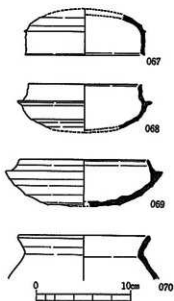


図37 古墳時代中期出土遺物(2) 第Ⅶ層 土器

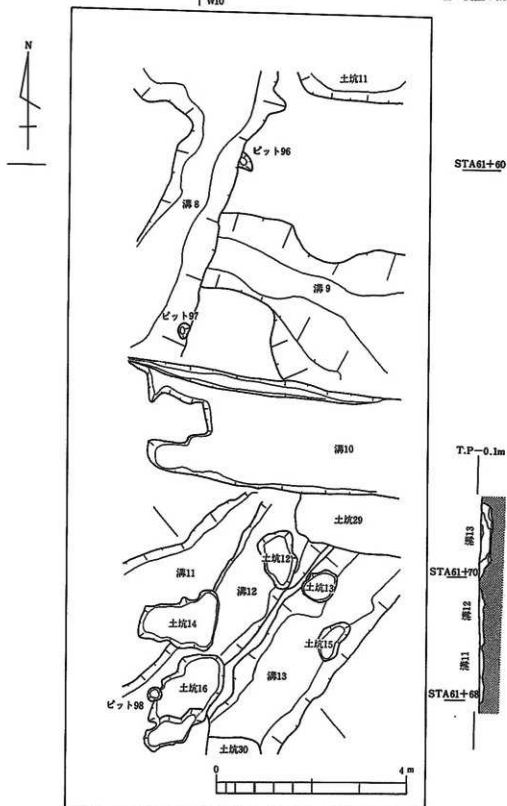


図38 13B トレンチ遺構面

7. 13Bトレンチの主要な遺構

<溝8>

13Bトレンチの北側で検出した南西—北東に走行する溝である。東にて溝9を切り込み、南側は溝10に切られている。幅約1.7m、深さ約0.2mをはかる。埋土は3～5mm前後の多量の礫を含む。暗青灰色粘土の単一層である。出土遺物は、古墳時代中期の須恵器を得ているが、小破片のため図化できない。

<溝9>

13Bトレンチの中央、北寄りにて検出した浅い溝状遺構である。南側は溝10によって切られているが出土土器の接合資料等から、本来は溝12と同一の遺溝であると考えられた。幅約2.7～3.0mで、深さは西側で0.2m、東端で約0.4mをはかる。断面は浅い逆台形の形態を呈している。埋土は、溝中の土層堆積状況から(I)黒褐色粘土、(II)暗青灰色シルトの2層に分層でき、遺物はすべて(I)層から出土した。出土遺物は、溝10同様に東側に集中して古墳時代中期の須恵器、土師器、製塩土器等を得ている。

須恵器の杯蓋(071)は、口縁部が外反し、端部は凹面をなす。稜は明瞭である。073は口縁部が直下になる。どちらも天井部外面のへら削りは稜の近くまで及ぶ。土師器碗(077)は口縁部が内彎して立ち上がる。端部は内傾し内側に僅かに膨らむ。他に、075、076、078がある。高杯(図36・065)は水平に近い杯底部からやや内彎気味に立ち上がる口縁部をもつ、脚部との接合部は凹む。溝12出土の土器片が接合したものである。製塩土器(079)は、外面の口縁部以下体部下半までを叩き目、内面を指ナゲ調整し、底部の内外面には指圧痕を残す。

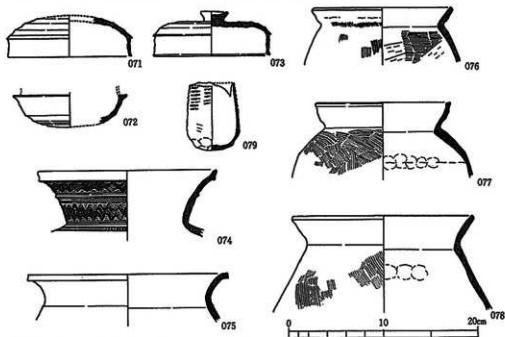


図39 古墳時代中期出土遺物(3) 溝9 土器

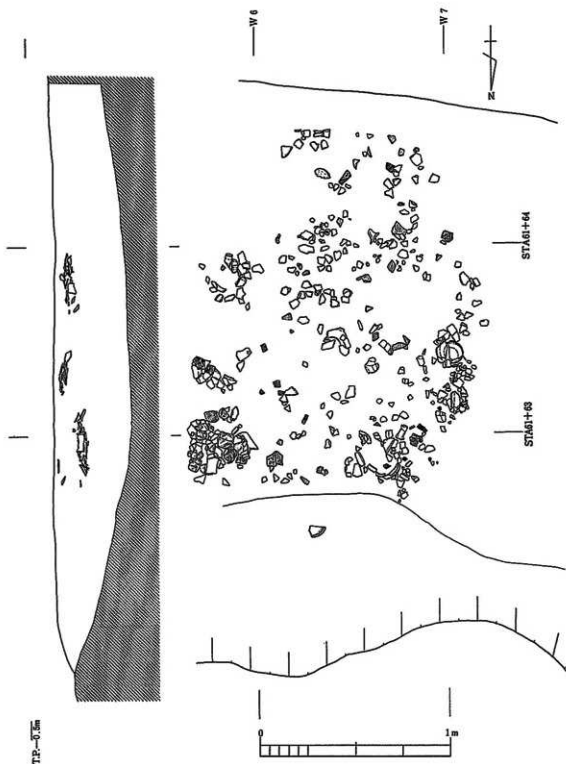


図40 13Bトレンチ溝9遺物出土状況

T.P. 0.5m



图41 13B トレンナ溝10遺物出土状況

<溝10>

13Bトレンチの中央にて、溝8・9・11・12、土坑29の各遺構を切り込んで検出した。東西に走行する幅約2.3m、深さ東端約0.3mをはかる古墳時代中期の溝状遺構である。なお、深さは西へ行くにしたがって浅くなり西側で収束一消失する。埋土は2～5mm前後の小レキ、カーボン粒を多量に含む黒灰色粘土の単一層である。遺物は東側に集中して出土した(図41、図版11)。出土土器片は集中して出土した割に接合する資料は少ない。土器には須恵器の壺、甕、高杯、杯蓋、杯身、土師器等がある。大半は須恵器の杯蓋、杯身、高杯で、土師器は小破片2～3点である。中でも有蓋高杯の出土の著しい点は遺構の性格を考えていく上で興味深いと云えよう。本報告をまっさらに検討する必要がある。

杯蓋(080～084)は口径11～13.5cm程度のもので、口縁部は外反ないしは直下に下る。端部には内傾する凹面がある。口縁部の占める割合が天井部分に比べて高い。天井部は丸みをもち、

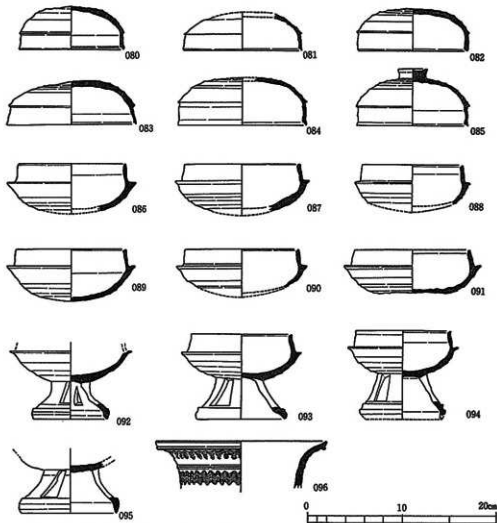


図42 古墳時代中期出土遺物(4) 溝10 土器

外面のヘラ削りは高さの約1/2前後に及ぶ。

杯身は立ち上がりがやや内傾する。口径10.5～12cm。端部は蓋と同様凹面をもつが、086は丸く、091は段を有す。受部は上外方に伸びる。091の底部は平坦。

高杯は有蓋が主体である。杯身は蓋杯の杯身と同一形である。脚は『八』の字形に開き、三方にスカシがある。高杯の蓋（085）には、中央部のやや凹んだつまみが付く。無蓋高杯は確認できなかった。

甕（096）は、口縁部が外罫して開く。端面と外端に凹線があり、外面には凸線と、その上下に波状文を施す。

<溝11>

溝12平行して走行する幅約1.8m、深さ約0.1mの溝である。両側は溝10、土坑14によって切られている。溝中の埋土は、暗灰色シルトによって充填されていた。遺物はまったく含まれていない。

<溝12>

溝13に併行して走行する古墳時代中期の溝である。上部は土坑12・14・16・29に攪乱を受け、北は溝10に切られている。幅約1.7m、深さ約0.2mをはかる。埋土は暗褐色色粘軟砂。出土遺物には古墳時代中期の須恵器（蓋杯）、土師器（高杯）がある。

高杯は、溝9出土の高杯（図36・065）に接合する破片である。なお、溝12より同一個体と考えられる脚部も出土している。

<溝13>

13Bトレンチの南側において検出した幅約1.9m、深さ約0.3mをはかる古墳時代中期の溝である。上部は土坑13・15によって一部攪乱を受け、北は土坑29に切られている。溝中の埋土は、4

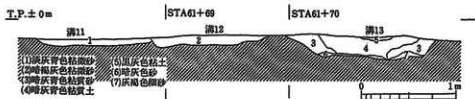


図43 13Bトレンチの11～13東西セクション

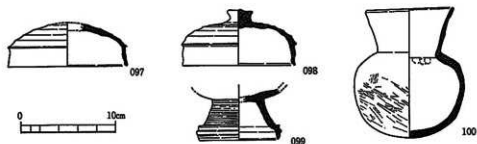


図44 古墳時代中期出土遺物(5) 溝13 土器

層に分けられ(I)暗灰青色粘土、(II)暗灰青色粘質砂、(III)灰褐色細砂、(IV)暗灰色砂である。遺物は(I)(II)層から須恵器の杯蓋、杯身、短脚高杯、土師器の広口壺の出土を見ている。

須恵器の杯蓋は、口縁部が外反し、端部には凹面がある(097)。天井部の回転ヘラ削りは高さの約半に及ぶ。098は、口縁部が直下に下がり、ヘラ削りの幅が広い。中央のやや尖がるつまみが付く。高杯(099)は、脚端部に凸線がめぐる。外面はカキ目調整。

土師器の壺(100)は、肩の要る体部と、頸部から斜め上方に開く口縁部をもつ。底部は丸い。外面の体部以下に、粗い刷毛目状の調整痕が残る。

<土坑12>

溝12埋土上面において検出した土坑である。径0.7×1.2mの不整楕円形プランを有し、断面形態はU字状で、深さ約0.2mをはかる。坑内埋土は5~10m前後の焼土粒、カーボンを多量に含む黒褐色粘土である。遺物は、焼土粒と混在して製塩土器の集中出土をみた。

製塩土器は多数出土したが、小破片で接合可能なものはほとんどない。口縁部破片も多く、個体数もかなり上るものと思われる(図48)。口縁部外面に叩き目を残すものもある。

<土坑16>

13Bトレンチの西南隅において検出した古墳時代中期の土坑である。溝12、溝13を切り込んでいる。平面プランは径1.2×2.4mの長楕円形を呈し、深さは約0.2mをはかる。断面形態は浅いU字状で、坑底は平坦面をなす。南側にきてさらに一段浅い径0.6×1.4m、深さ0.1mの土坑がみられる。これは、土坑16とは異なる別の遺構である可能性も考えられる。坑内埋土は2層に分けられる。(I)層では須恵器の大甕が横位にて出土している(図46、図版37)。

南土坑も埋土は、2層に分層できる。遺物の大半は(II)層から出土している。出土遺物には、須恵器、土師器、土錘等がある。中でも、つまみ部を有する土師質の蓋(図110)の出土は稀なものと言えよう。

須恵器では杯蓋、杯身、高杯、甕などがある。杯蓋(101、102)の口縁部は外反して下がり、端部には段がある。天井部の回転ヘラ削りは稜線付近まで及ぶ。杯身(103)は、たちあがり内傾し、端部の凹面も内傾する。104には中央のやや凹んだつまみが付く。105は有蓋高杯の脚である。脚端部に凸線がめぐる。107、108は口縁部の外端に凸帯がある。109は口径43.5cm、器高98cmの大型甕で、口縁部は頸部から内傾気味に立ち上がり更に外反する。端部は上下に拡張し、口縁部外面の上半部に沈線から成る低い凸線が2本めぐる。口縁端から凸線間には波状文を2条施す。体部は底部付近で彎曲する。内面には、青海波文の輪郭が残る。同一地点より個体の異なる大型甕の口縁部もいくつか出土した。

土師器は蓋(110)、高杯脚(111)、甕(112、113)がある。蓋は巻頭図版3の説明にもあるとおり、須恵器の模倣と考えられる。甕は屈曲部から内傾して立ち上がる口縁部をもち、端面は内傾する。以上の他に製塩土器も出土している。

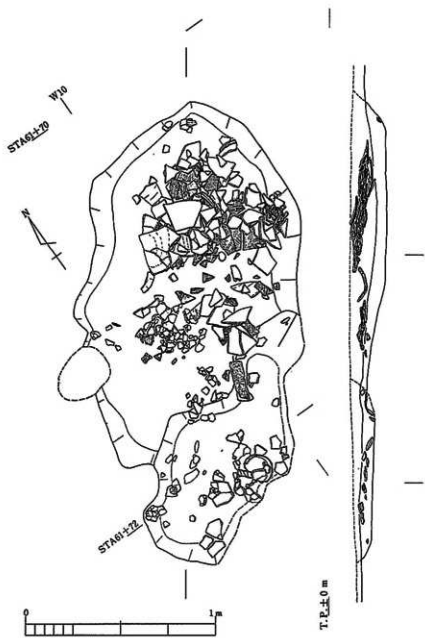


图45 13B トレンチ土坑16遺物出土状況

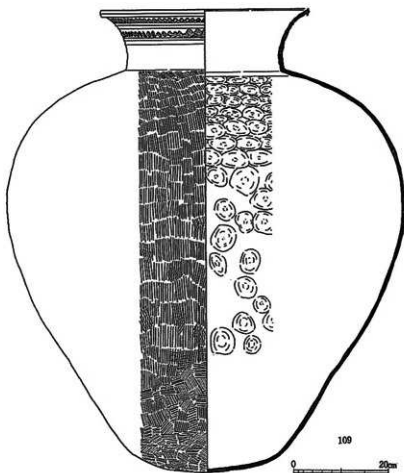
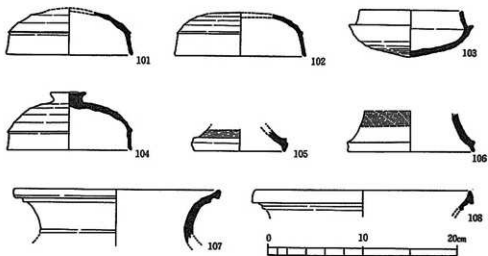


図46 古墳時代中期出土遺物(6) 土坑16 土器

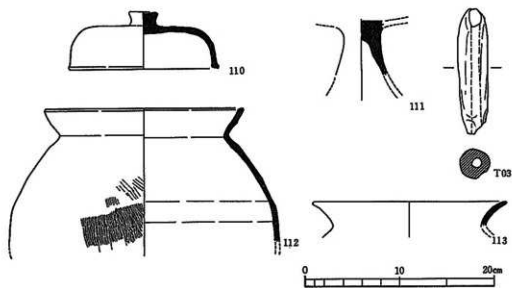


图47 古墳時代中期出土遺物(7) 土坑16 土器・土製品

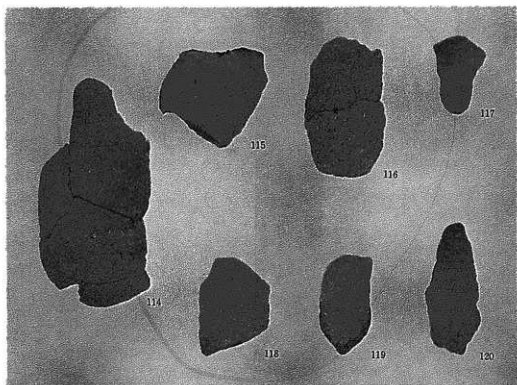


图48 古墳時代中期出土遺物(8) 土坑12 製瓶土器写真

8. 中・近世

〈中世〉 第Ⅲ層は古墳時代から鎌倉・室町期までの包含層である。本層はⅢA・ⅢBの2層に分層することの可能性を有するがあまり明瞭ではない。遺物は須恵器・土師器・緑釉土器・瓦器などが含まれていた。130は奈良時代の壺蓋、131は緑釉土器の高台、137は鉄鉢形の鉢である。瓦器は鎌倉時代のもので、132は13Bトレンチの古墳時代中期の溝10を切って検出されたビット内から出土したものである。以前の調査においても、鎌倉時代に属する井戸が検出されていることから、中世期の遺構面が存在したものとと思われるが、削平を受けたものといえよう。

第ⅢB層上面においては、13Bトレンチで「道状遺構」が検出できた。本遺構は第ⅢA層上面において幅 2.8mで見出し、南北側の青灰色粘土(第ⅢA層)を排除したものである。道状遺構においては全く足跡が認められないことから乾燥が進んでいたものといえる。本遺構の時期は以下の足跡面の時期とあまり時期差がないと思われる。

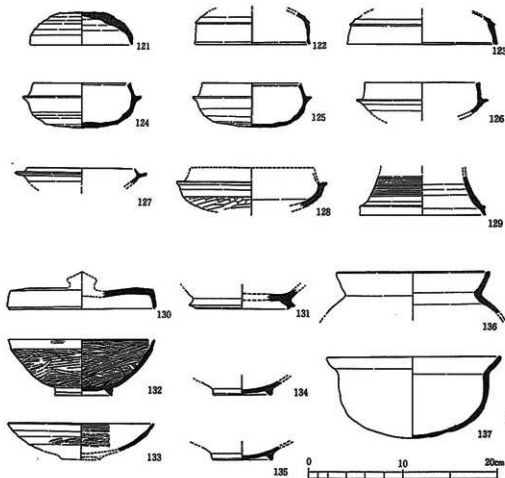


図49 第Ⅲ層出土遺物(1) 土器

〈近世〉 近世期に位置する第ⅢA層上面は、上面に足跡が多数残っていることや、粘土層がグライ化し、下位に鉄分が沈着することから、水田面であったことが推定される。しかし9Aトレンチにおいてのみ、第Ⅲ層(黄青灰色粘土層)が存在せず、赤茶色土層に変化していた。両層の前後関係について、「切り合い」関係は赤茶色土層が切っているが、ほぼ同時期といえよう。

第Ⅲ層直上には、第Ⅱ層黄褐色粗砂がほぼ全面に覆っており、足

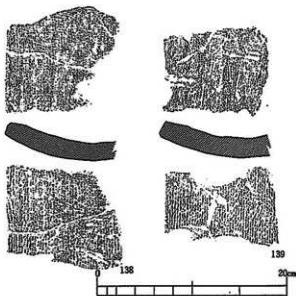


図50 第Ⅲ層出土遺物(2) 瓦
E22

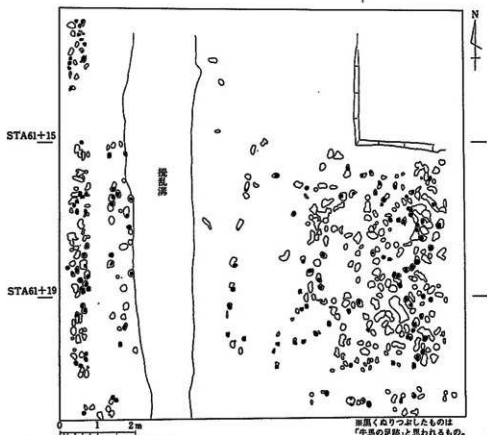


図51 9Bトレンチ近世遺構面

跡内にも同粗砂が入っていた。このことから、水田面が「洪水」などの影響により埋没してしまったものと言える。

足跡が残っていたトレンチは、7A・8A・9B・10B・13B・14B・15B・7C・9C・5Dの10カ所に及んでいた。足跡には「人間」と「牛馬」の足跡が見出されている。足跡は方向性、状況を考慮しても、検出状況がアトランダムであるため、意味づけと性格を推定するに至らなかった。

しかし9Bトレンチは「牛馬」と思われるハート型を呈する足跡を多く見出した。特にトレンチ西側の足跡については南北方向に歩いた状況と思わせる。同時に中央部にも南北方向の歩行が認められる。10Bトレンチは人間の足跡が検出できた。多数の足跡から2方向の歩行状況が推定できた。1はトレンチ東から、北北西に向かう途中で、方向を北に変え歩行している。2はトレンチ西から北東に向かい歩行している。西側中央部分には南北方向に位置する牛馬の足跡が一部見出し得た。

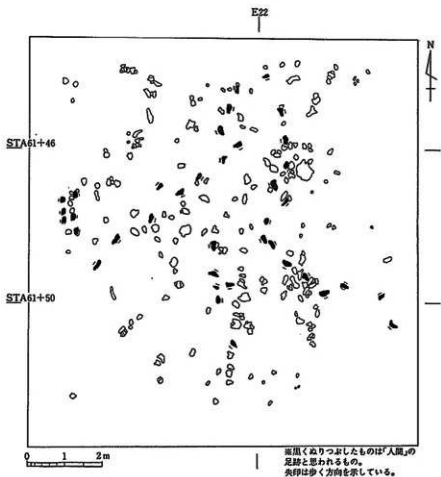


図52 10Bトレンチ近世遺構面

Ⅲ まとめにかえて —新家遺跡の変遷概略—

新家遺跡は、縄文時代から近世までに9層の面を検出し調査を実施したが遺構等を有する主要な7期について概略を述べる。

(A) 縄文時代

遺構については認められなかったが、Ⅱ層上面において縄文時代晩期の土器の出土を見た。またⅡ層下部にシジミ層を検出しており、日下貝塚(東大阪市)出土のシジミとの関連性をうかがわせている。

(B) 弥生時代 前期

遺構は、杭跡、土坑、カニ穴、自然流路などが検出され、本遺跡と弥生人との接触を示している。カニ穴はクロベンケイガニの掘った生物痕であると教示(梶山彦太郎氏)を受け、杭間にもカニ穴があることから侵水している状況を示している。本時期においても、今だ完全に陸地化せず、河内湖水面の上下による面の露出を思わす程度である。土坑も不定形で人為性にとほしく、当時の湖漁撈の前進基地的な性格を表現している。

(C) 弥生時代 中期

瓜生堂遺跡や以南の遺跡に見られるように、弥生中期の遺構は多く見い出せるにも関わらず、本遺跡においては、粘性堆積物の泥岩層を形成するのみである。Ⅲ層上面において、一部のトレンチに足跡があり、人が足を踏み入れた痕跡を残している。

(D) 弥生時代 後期

弥生時代は後期に至っても、自然河川を検出するのみで生活空間の居住域としての様相を今だ示していない。自然河川の形成は、弥生中期に端を発し、埋没時期は後期終末に至ると考えられる。本期の層中に木器が多く出土することから河内湖内の沈着した遺物といえよう。

(E) 古墳時代 初頭

古墳時代に入ると大規模な自然流路の氾濫原となり、部厚い堆積物を形成し、当地の居住条件を整備してくる。河内湖の後退によると思われるCトレンチの沼地化を生み出してくる。

(F) 古墳時代 中期

5世紀後半～末に至ると、多く遺構が、見い出され、安定した土地となったことを示している。当地において初めて居住域としての地位を獲得したといえよう。しかし、6世紀に入る遺物が無いことから短期間で終わってしまったと言える。

(G) 中・近世

古墳時代以降は、第Ⅷ層が全面を覆い、第Ⅲ層上面の足跡面が形成される。この面は水田面に相当すると思われ、洪水による氾濫砂層(第Ⅲ層)が全面にかぶっていた。以前の調査においては中世期の井戸が検出されているが、今回は中世以降としては全く見い出せない。13BにおけるⅢ層中位の道状遺構は足跡(水田)面とあまり時期差はないと言えよう。

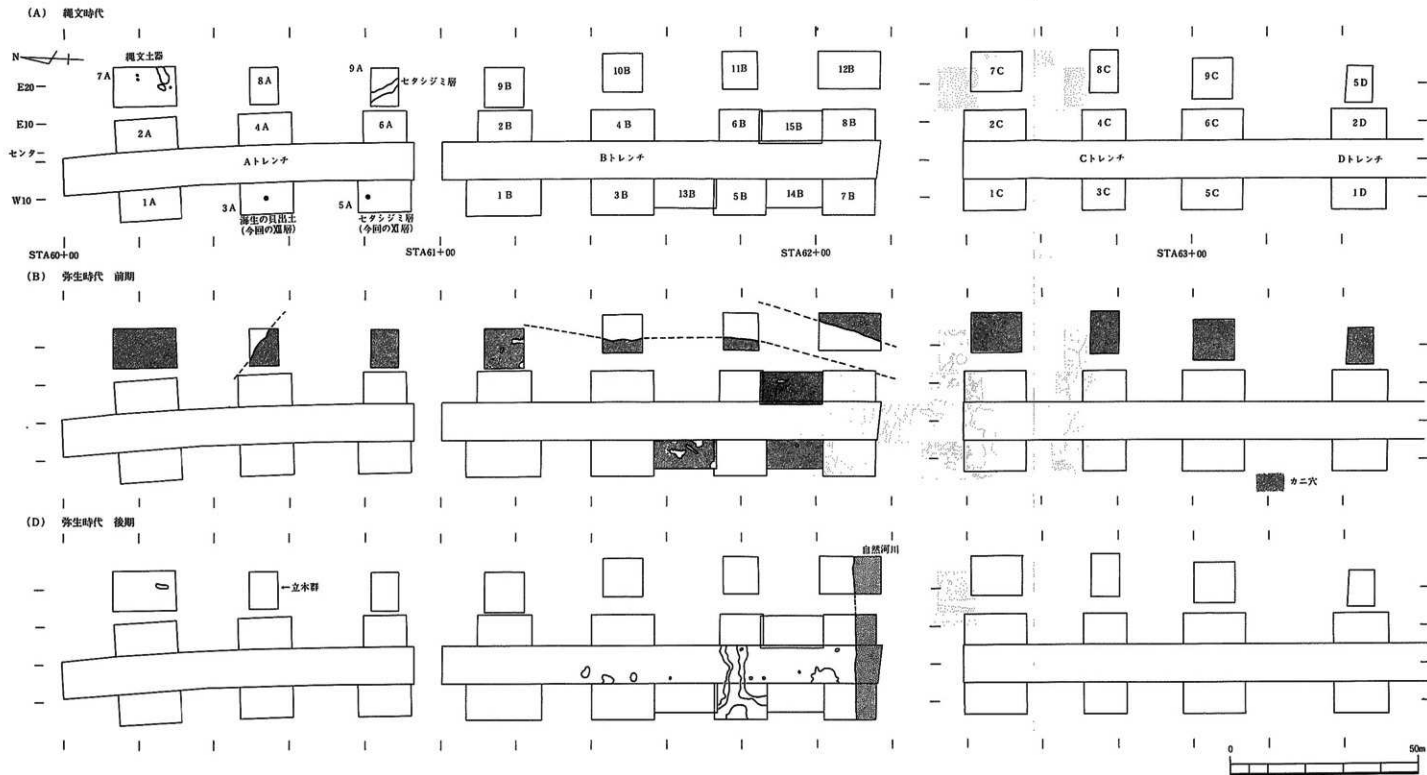


図53 新家遺跡変遷略図 (縄文時代後期～弥生時代後期)

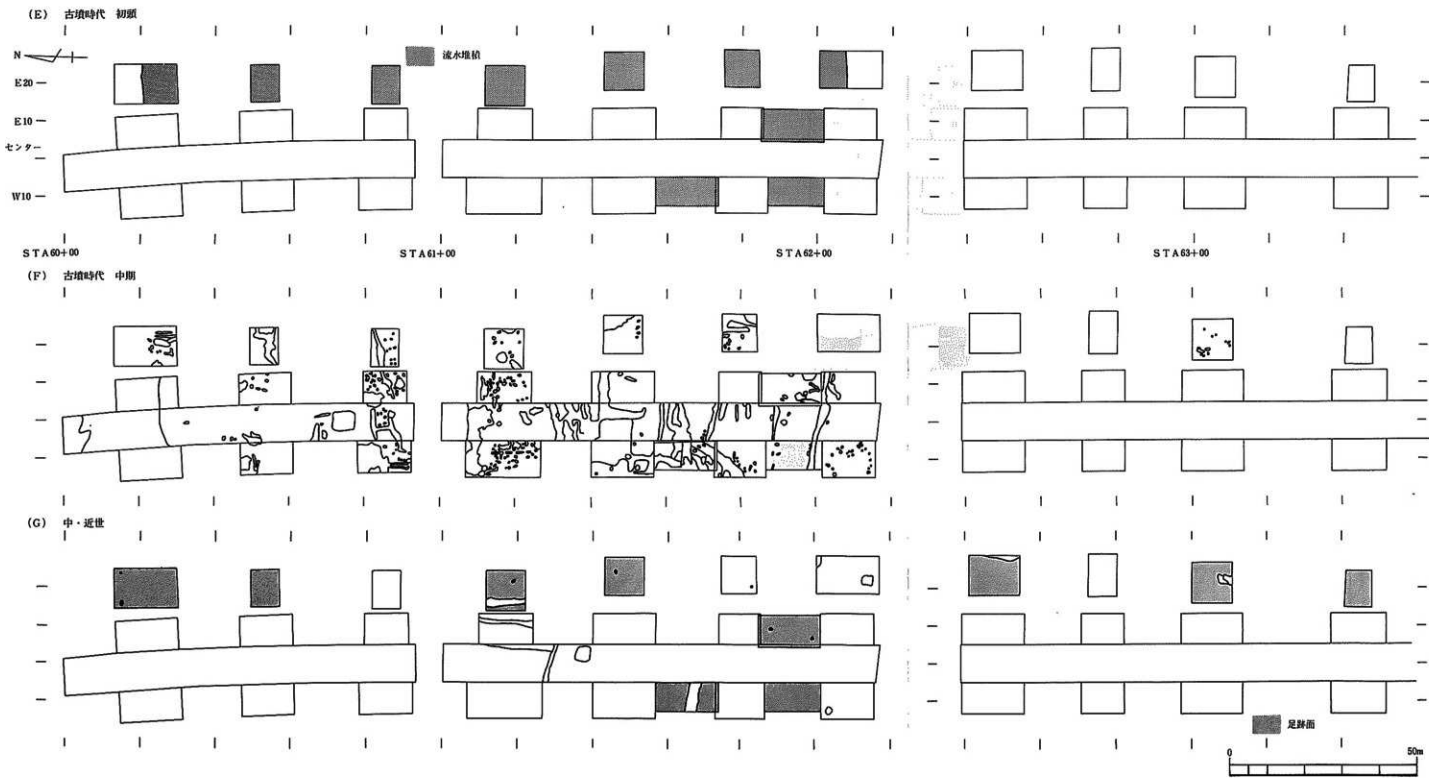


図54 新家遺跡変遷略図（古墳時代初頭～近世）

表3 新家遺跡(その2) 遺構表

足跡面			杭列			ピット		
1	7A	近世 ⅢA層上面	1	13B	弥生前期 Ⅸ層上面	1・2	7A	近世 ⅢA層上面
2	8A	〃 〃	溝			3	9B	〃 〃
3	9B	〃 〃	1	10B	近世以降 Ⅰ層上面	4	10B	〃 〃
4	10B	〃 〃	2	8A	古墳中期 Ⅴ層上面	5	15B	〃 〃
5	13B	〃 〃	3	〃	〃 〃	6	〃	中・近世 ⅢB層上面
6	14B	〃 〃	4	〃	〃 〃	7~11	9A	古墳中期 Ⅴ層上面
7	15B	〃 〃	5	〃	〃 〃	12~35	7A	〃 〃
8	7C	〃 〃	6	11B	〃 〃	36~39	8A	〃 〃
9	9C	〃 〃	7	〃	〃 〃	40~62	9A	〃 〃
10	5D	〃 〃	8	13B	〃 〃	63~77	9B	〃 〃
11	15B	中・近世 ⅢB層上面	9	〃	〃 〃	78~84	10B	〃 〃
12	7C	古墳以降 Ⅳ層上面	10	〃	〃 〃	85~95	11B	〃 〃
13	9C	〃 〃	11	〃	〃 〃	96~98	13B	〃 〃
14	14B	古墳初頭 Ⅵ層上面	12	〃	〃 〃	99~100	14B	〃 〃
15	15B	〃 〃	13	〃	〃 〃	101~110	15B	〃 〃
16	9B	弥生後期 Ⅷ層上面	14	14B	〃 〃	111~130	9C	〃 〃
17	13B	〃 〃	15	15B	〃 〃	小ピット列		
杭跡			16	〃	〃 〃	1	14B	古墳中期 Ⅴ層上面
1	9C	近世 ⅢA層上面	17	〃	〃 〃	2	14B	〃 〃
2	〃	〃 〃	18	13B	弥生前期 Ⅸ層上面	3	15B	〃 〃
3	14B	古墳以降 Ⅳ層上面	小溝群			小ピット群		
4	〃	弥生中期 Ⅵ層上面	1	7A	古墳中期 Ⅴ層上面	1	10B	古墳中期 Ⅴ層上面
5	〃	〃 〃	土坑			落ち込み		
6	9B	弥生前期 Ⅷ層上面	1	10B	近世以降 Ⅰ層上面	1	9B	近世 ⅢA層上面
7	〃	〃 〃	2	12B	近世 ⅢA層上面	2	10B	古墳中期 Ⅴ層上面
8	〃	〃 〃	3	12B	〃 〃	3	11B	〃 〃
9	〃	〃 〃	4	11B	中・近世 ⅢB層上面	4	13B	弥生前期 Ⅷ層上面
10	〃	〃 〃	5	15B	〃 〃	5	7A	縄文晩期 Ⅷ層上面
11	13B	〃 〃	6	7A	古墳中期 Ⅴ層上面	6	〃	〃 〃
12	〃	〃 〃	7~10	9B	〃 〃	自然河川		
13	〃	〃 〃	11~16	13B	〃 〃	1	12B	弥生後期 Ⅷ層上面
14	〃	〃 〃	17~20	15B	〃 〃	2	8A	弥生前期 Ⅷ層上面
15	〃	〃 〃	21~24	9B	弥生前期 Ⅷ層上面	2	10B	〃 〃
16	〃	〃 〃	25・26	13B	〃 〃	2	11B	〃 〃
17	15B	〃 〃	27	14B	〃 〃	2	12B	〃 〃
18	〃	〃 〃	28	15B	〃 〃	道状遺構		
19	〃	〃 〃	29	13B	古墳中期 Ⅴ層上面	1	13B	中・近世 ⅢB層上面
20	〃	〃 〃	30	13B	〃 〃			

表4 遺物一覧表

番号	分類	トレンチ	出土	写真	番号	分類	トレンチ	出土	写真
1	縄文土器 深鉢	7 A	Ⅴ層上面	図版15	041	弥生土器 鉢	12 B	自然河川1内	
2	" "	" "	" "	"	042	" 高杯	" "	" "	
3	" "	" "	" "	"	043	" 底部	" "	" "	
4	" "	" "	" "	"	044	" "	" "	" "	図版21
5	" "	" "	" "	"	045	" 甕	" Ⅵ・A層中	" "	図版22
6	" "	" "	" "	"	046	" "	" Ⅵ・B層中	" "	"
7	弥生土器 壺	10 B	Ⅴ層中		047	" "	" Ⅴ層上面	" "	"
8	" "	" "	" "		048	" "	" "	" "	"
9	" 鉢	9 B	" "		049	" 鉢	" "	" "	"
10	" 壺	10 B	" "		050	" 甕	13 B	Ⅴ層中	図版21
11	" "	11 B	" "	図版16	051	" "	14 B	" "	"
12	" "	13 B	落ち込み4内	"	052	庄内式土器高杯	8 A	Ⅴ層中	
13	" 鉢	13 B	" "	"	053	酒津式土器甕	14 B	" "	図版25
14	" ミニチュア土器	10 B	Ⅴ層中		054	" "	9 B	" "	"
15	" 甕	10 B	" "		055	庄内式土器甕	13 B	" "	"
16	" "	9 B	土坑23内		056	" "	9 B	" "	"
17	" "	13 B	落ち込み4内	図版16	057	" "	" "	" "	"
18	" "	9 B	土坑23内		058	" "	" "	" "	"
19	" "	9 B	Ⅴ層中		059	" "	" "	" "	"
020	" "	13 B	落ち込み4内	図版17	060	須恵器 杯身	11 B	落ち込み3内	図版34
021	" "	9 B	Ⅴ層中	"	061	" "	13 B	溝9と溝10接合	
022	" "	10 B	" "		062	" "	14 B	溝14内	図版34
023	" "	11 B	" "		063	" 高杯蓋部	13 B	土坑30内	"
024	" "	9 B	" "	図版17	064	" 有蓋高杯	" "	" "	"
025	" "	" "	" "		065	土師器 高杯	" "	溝9内	
026	" "	13 B	落ち込み4内	図版17	066	" 羽釜	11 B	落ち込み3内	
027	" "	11 B	Ⅴ層中		067	須恵器 杯蓋	13 B	Ⅴ層中	
028	" "	9 B	" "		068	" 杯身	" "	Ⅴ層上面	
029	" "	10 B	" "		069	" "	9 C	Ⅴ層中	
030	" "	" "	" "	図版17	070	土師器 甕	13 B	Ⅴ層上面	
031	" 鉢	13 B	落ち込み4内		071	須恵器 杯蓋	" "	溝9内	
032	" 底部	9 B	Ⅴ層中		072	" 杯身	" "	" "	
033	" "	13 B	落ち込み4内	図版17	073	" 高杯蓋部	" "	" "	図版34
034	" "	" "	土坑25内		074	" 壺	" "	" "	
035	" "	11 B	Ⅴ層中		075	土師器 甕	" "	" "	
036	" "	9 B	" "		076	" "	" "	" "	
037	" 壺	12 B	自然河川1内	図版21	077	" "	" "	" "	図版34
038	" "	" "	" "	"	078	" "	" "	" "	
039	" "	" "	" "	"	079	" 製塩土器	" "	" "	図版34
040	" 鉢	" "	" "		080	須恵器 杯蓋	" "	溝10内	図版35

番号	分類	トレ ンチ	出土	写真	番号	分類	トレ ンチ	出土	写真
081	須恵器 杯蓋	13B	溝10内		121	須恵器 杯蓋	12B	Ⅱ層	
082	" "	"	"	図版35	122	" "	9A	"	
083	" "	"	"		123	" "	12B	"	
084	" "	"	"	図版35	124	" 杯身	13B	"	
085	" 高杯蓋部	"	"		125	" "	"	"	
086	" 杯身	"	"	"	126	" "	12B	"	
087	" "	"	"	"	127	" "	"	"	
088	" "	"	"	"	128	" "	"	"	
089	" "	"	"	"	129	" 脚部	13B	"	
090	" "	"	"	"	130	" 蓋	8A	"	
091	" "	"	"	"	131	緑釉陶器 高台	"	"	
092	" 高杯杯・脚部	"	"		132	瓦器 塊	13B	ピット内	図版37
093	" " "	"	"	図版36	133	" "	5D	Ⅱ層	
094	" " "	"	"	"	134	" 高台	12B	"	
095	" " 脚部	"	"	"	135	" "	"	"	
096	" 壺	"	"		136	土師器 甕	13B	"	
097	" 杯蓋	"	溝13内	図版36	137	" 鉢	9A	"	図版37
098	" 高杯蓋部	"	"	"	138	瓦	15B	"	
099	" " 脚部	"	"		139	"	14B	"	
100	土師器 壺	13B	"	"	T01	土製円板	13B	落ち込み4内	図版19
101	須恵器 杯蓋	"	土坑16内		T02	"	9B	Ⅱ層中	"
102	" "	"	"		T03	土師質 土埴	13B	土坑16内	図版37
103	" 杯身	"	"		S01	サスカイト 石炭	13B	Ⅱ層上面	図版18
104	" 高杯蓋部	"	"	図版37	S02	" "	12B	"	"
105	" " 脚部	"	"		S03	" "	11B	Ⅱ層中	"
106	" 脚部	"	"		S04	サスカイト 不定形刃器	13B	溝18内	"
107	" 甕	"	"		S05	" "	"	Ⅱ層中	"
108	" "	"	"		S06	緑色片岩 石燈丁	"	Ⅱ層上面	図版19
109	" "	"	"	図版37	B01	骨製品か?	13B	Ⅱ層中	図版18
110	土師器 壺	"	"						
111	" 高杯脚部	"	"						
112	" 甕	"	"						
113	" "	"	"						
114	土師器 製塩土器	"	土坑12内						
115	" "	"	"						
116	" "	"	"						
117	" "	"	"						
118	" "	"	"						
119	" "	"	"						
120	" "	"	"						

表5 木製品一覽表

木器番号	名 称	トレンチ	出 土 地 点	実測図	写 真	備 考
W01	用途不明木製品	8 A 木55	暗灰粘土混粗砂 (Ⅴ層) 中	図 8	図版15	縄文時代晩期
W02	木杭	15 B 木19	灰白色粘土 (Ⅴ層) 上面 杭④		図版19	弥生時代前期
W03	木杭	15 B 木18	" " " 杭④		" "	" "
W04	木弓	10 B 木91	茶黑色粘土 (Ⅴ層) 中	図17	図版20	" "
W05	木弓	10 B 木94	茶黑色粘土から (Ⅴ層?)		" "	" "
W06	用途不明木製品	11 B 木30	自然河川2・上層褐色粗砂	図17	" "	" "
W07	加工木片(ヘラ状)	11 B 木28	西壁中・泥炭層 (Ⅴ層) 中	" "	" "	弥生時代中期
W08	方形盤	10 B 木79	泥炭層 (Ⅴ層) 上面	図25	図版23	弥生時代後期
W09	木製の高杯	12 B 木74	自然河川1 第3層 木④	" "	" "	" "
W10	布巻具(両端有頭棒)	10 B 木82	暗青色粘土 (Ⅴ層) 中	" "	" "	" "
W11	琿?	7 C 木1	南壁 暗青色粘土 (Ⅴ層) 中	" "	" "	" "
W12	有頭棒	12 B 木55	暗青色粘土 (Ⅴ層) 中 木器群Ⅰ-①	" "	図版24	" "
W13	"	12 B 木2	" " " " 木-①	" "	" "	" "
W14	丸棒(柄か?)	10 B 木93	南壁 泥炭層 (Ⅴ層) 上面	" "	" "	" "
W15	角材(納穴)	10 B 木83	暗青色粘土 (Ⅴ層) 中	図25	" "	" "
W16	木杭	12 B 木28	" " " 木器群Ⅰ-①	" "	" "	" "
W17	木槽	12 B 木1	" " " 中 木①	図26	図版25	" "
W18	円形盤	13 B 木7	側溝 砂層 (Ⅴ層) 褐色粗砂中	図29	図版26	古墳時代初頭
W19	えぶり	9 A 木4	" " (Ⅴ層) 上面	図30	" "	" "
W20	ナスビ形着柄罽	8 A 木6	砂層 (Ⅴ層) 中位青灰色粘散砂	" "	図版27	" "
W21	櫛状木製品	9 B 木31	" " " " "	図31	" "	" "
W22	アカカキ	8 A 木15	" " " " 青灰色粘散砂	図30	" "	" "
W23	搦棒	9 B 木35	" " " " "	図23	" "	" "
W24	有頭棒	10 B 木11	" " シルト中 木④	" "	図版28	" "
W25	有頭棒	10 B 木72	暗青色粘土 (Ⅴ層) 上面 木④	" "	" "	" "
W26	有頭棒	10 B 木71	" " " " 木④	" "	" "	" "
W27	有頭棒	10 B 木70	" " " " 木④	" "	" "	" "
W28	用途不明木製品	10 B 木77	" " " " 木④	図32	" "	" "
W29	加工木片	9 B 木12	砂層 (Ⅴ層) 下位	" "	" "	" "
W30	用途不明木製品	8 A 木53④	南壁 砂層 (Ⅴ層) 下層・青黒粘散砂	" "	図版29	" "
W31	用途不明木製品	9 B 木43	砂層 (Ⅴ層) シルト中 木④	" "	" "	" "
W32	板材(端部加工)	8 A 木7	" " 中位 青灰粘散砂	" "	図版30	" "
W33	板材(納穴)	8 A 木52	南壁 暗青色粘土 (Ⅴ層) 上面	図33	" "	" "
W34	板材(納穴)	9 B 木19	砂層 (Ⅴ層) 下位	" "	" "	" "
W35	板材(納穴)	7 A 木2	暗青色粘土 (Ⅴ層) 上面	図35	" "	" "
W36	板材(納穴)	10 B 木12	砂層 (Ⅴ層) 中 木④	" "	図版31	" "
W37	板材(納穴)	14 B 木1	" " " 下位 青灰色砂	" "	" "	" "
W38	木杭	9 B 木24	" " " " "	図版32	" "	" "
W39	木杭	10 B 木14	" " " 中 木④・⑤	" "	" "	" "
W40	角杭	9 B 木77	" " " 中 木④	" "	" "	" "
W41	木杭	14 B 木3	" " " 下位	" "	" "	" "
W42	用途不明木製品	9 B 木82	" " シルト中 木④	図35	" "	" "
W43	用途不明木製品	15 B 木1	" " " 中	" "	図版33	" "
W44	木杭	10 B 木19	" " " 上位	" "	" "	" "
W45	棒材(納・納穴)	8 A 木4	" " " 上位	図35	" "	" "
W46	角材	8 A 木47	" " " 中 木④	" "	" "	" "

※ 上面：土層の上に載るもの、中：土層内に含まれるもの、砂層 (Ⅴ層)：木器のみ上位・中位・下位としたものがある

付載1 シジミ層から検出した、縄文時代晩期の植物遺存体（種子）について

山口 誠 治

1. はじめに

今調査で出土した植物遺存体（種子）について同定を試みたので、ここに報告する。

出土した植物遺存体は、縄文時代晩期に堆積したシジミを含む暗灰色粘土混粗砂層（Ⅷ層）より検出された。検出したのは9 A トレンチの暗灰色粘土混粗砂層（Ⅷ層）の北と南の地点で、コンテナ各2杯分の土壌を1.0mmのふるいにかけて水洗いして取り出されたものである。尚、同定は慎重に取り上げられたものについてのみ行なった。

2. 同定結果とまとめ

同定結果は2地点別にまとめて表に示した。今回の調査で出土した種子は、つぎの17科2属15種である。（表中の数字は、同定した個数を示す。）

出土している種子の数から多い順に並べると、イチイガシ、エゴノキ、ウキヤガラ、アカメガシワ、トチノキ、スダジイ、カヤ、イヌガヤ、クマノミズキ、ツガ、オニグルミ、サワグルミ、ムクロジ、ミズキ、カナムグラとなる。木本 (Arbor) は、カヤ、イヌガヤ、ツガ、オニグルミ、サワグルミ、イチイガシ、スダジイ、クマノミズキ、ミズキ、ムクロジ、アカメガシワ、トチノキ、エゴノキを同定し、つる植物としてフジ属、ブドウ属、カナムグラを同定した。草本 (Herb) としては、ウキヤガラ、カナムグラ、イネ科、キンボウゲ科を同定した。同定した植物の中で食べられるものとしては、カヤ、イヌガヤ、イチイガシ、トチノキ、ブドウ属、ミズキが考えられる。また、木本の中で常緑樹として考えられるのはカヤ、イヌガヤ、ツガ、イチイガシ、スダジイであり、落葉樹としてはオニグルミ、サワグルミ、アカメガシワ、トチノキ、ムクロジ、ミズキ、クマノミズキなどが考えられる。なお、深山にはえる木としてオニグルミ、サワグルミ、トチノキが考えられる。同定した種子の多くはかけらが多く同定するのに大変困難であったが、以上のように種まで分類できた。同定した種子を実体顕微鏡で観察した結果、表面が削られたようなキズが多く見られたことから、採取された地点はつねに水流が存在し蝕磨されたものと考えられる。このことから判断すると、発掘された地点は河内湾のところへ川が流れこんでくる河口付近のように思われる。それで、かなり多量の土壌を採取し水洗いして取り出されたわりには種子の数が非常に少ないことがうなずける。なお、採取された種子は今調査の重要な時期と考えられる縄文時代晩期の一部にすぎず、全体を把握できるものではない。同定に関しては現在の植物の果実や種子の標本との比較により、分類形態的・生態的性質に一致することで慎重に判断した。

以上、種子の同定に関して終始ご教示下さった大阪市立大学 粉川昭平教授に感謝の意を表わす次第である。

【参考文献】

- 1) 大井次三郎著：「日本植物誌頭花編」至文堂（1978）

表 同定植物遺存体一覧

	科名	属種名(学名)	出土部位	採取法	
				9Aトレンチ 北 暗灰色粘土混粗砂 水洗篩別(50μ 1.0mm中)	9Aトレンチ 南 暗灰色粘土混粗砂 水洗篩別(50μ 1.0mm中)
菌類	ニクザキン科 (Hypocreaceae)		子 座		1
裸子植物	イチイ科 (Taxaceae)	カヤ (<i>Torreya nucifera</i>)	種子破片	2	
	イヌガヤ科 (Cephalotaxaceae)	イヌガヤ (<i>Cephalotaxus harringtonia</i>)	種子破片	2	
	マツ科 (Pinaceae)	ツガ (<i>Tsuga sieboldii</i>)	葉 片	1	
被子植物	イネ科 (Gramineae)		地下茎片		2
	カヤフリグサ科 (Cyperaceae)	ウキヤガラ (<i>Scirpus fiviatisii</i>)	種 子		12
	クルミ科 (Juglandaceae)	オニグルミ (<i>Juglans mandshurica</i> var. <i>sieboldiana</i>)	核 半 分	1	
		サワグルミ (<i>Pterocarya rhoifolia</i>)	種 子	1	
	ブナ科 (Fagaceae)	イチイガシ (<i>Quercus gilva</i>)	葉 片	1	2
			幼 果	3	4
			殻 斗	4	5
			芽		2
			果皮片		1
		スゲジイ (<i>Castanopsis cuspidata</i>)	果皮片	4	<
	キンボウク科 (Ranunculaceae)		種 子		1
	マメ科 (Leguminosae)	フジ属 (<i>Wisteria</i> sp.)	越冬芽	1	1
トウダイグサ科 (Euphorbiaceae)	アケミガシワ (<i>Mallotus japonicus</i>)	種 子	1	1	
		種子破片	1	3	
		外果皮片		1	
トチノキ科 (Hippocastanaceae)	トチノキ (<i>Aesculus turbinata</i>)	種子破片	2	3	
		外果皮片		1	
ムクロジ科 (Sapindaceae)	ムクロジ (<i>Sapindus mukrossii</i>)	種 皮 片	1		
ブドウ科 (Vitaceae)	ブドウ属 (<i>Vitis</i> sp.)	種 子		1	
ミズキ科 (Cornaceae)	ミズキ (<i>Cornus controversa</i>) クマノミズキ (<i>Cornus brachypoda</i>)	核	1		
		核	1		
		核破片		1	
クワ科 (Moraceae)	カナムグラ (<i>Humulus japonicus</i>)	種子破片		1	
エゴノキ科 (Styracaceae)	エゴノキ (<i>Styrax japonica</i>)	核破片	2	12	
貝類	シジミガイ科 (Corbiculidae)	殻 片		2	
		チウブガイ		1	
昆虫			サナギ?	2	

1. a



1. b



1. a, b オニグルミの核 (×2)

2.



2. クマノミズキ (×5)

5. a



5. b



5. a, b ミズキ (×7)

3.



3. サワグルミ (×5)

4.



4. アカメガシワ (×5)

6. a



6. b



6. a, b カヤ (×2)

7.



7. エゴノキ (×4)

8.



8. イヌガヤ (×3)

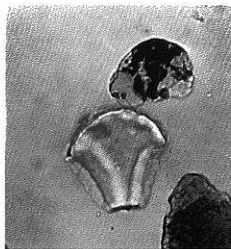
9.



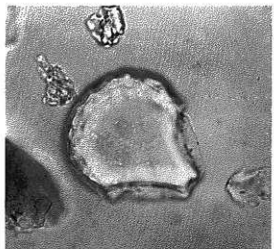
9. ツガの葉片 (×7)



①



④



②



⑤



③

- ① イネ機動細胞
プラント・オパール (×400)
- ② イネ機動細胞
プラント・オパール (×400)
- ③ ヨシ機動細胞
プラント・オパール (×400)
- ④ タケ機動細胞
プラント・オパール (×400)
- ⑤ チガヤ機動細胞様
プラント・オパール (×400)

付載2 新家遺跡におけるプラント・オパール分析

外山 秀一

(立命館大学大学院地理学専攻)

はじめに

珪酸植物 (silicicolous plant) のなかでもとりわけイネ科の植物は、珪酸 (SiO₂) を多く吸収・蓄積することで知られている。それらの葉身中に形成された珪酸質細胞は、植物珪酸体とよばれ、未分解のまま土中に還元される。プラント・オパール分析は、こうして土壌中に残存した植物珪酸体、なかでも機動細胞珪酸体を遺跡土中などから抽出し、その拾原植物種を推定する方法である。^{注1)} 藤原 (1974、75) ^{注2)} により手がけられたかかる分析法の確立は、わが国の農耕の起源あるいは古代における稲作農耕様式の究明に際して、貴重な知見の得られる可能性を示唆するものである。そしてその有効性は、これまでに日本各地の農耕遺跡において認められており、古代稲作農耕の実態が徐々に解明されつつあると言える。

今回、河内平野のほぼ中央部に位置する当遺跡において、プラント・オパール分析の機会が得られた。以下、その結果を報告する。

1. 層序と試料の採取

当遺跡では、12B トレンチの西壁において計18の試料が得られた。試料採取地点の層序は、以下のとおりである。

表 試料採取地点

標高(T.P.m)	層名	層厚(cm)	試料番号	層相
-1.0m ▶	VI・A	7	①	暗灰色 細粒砂
		17	② ③	暗灰色 シルト 下部に植物片混入
	VI・B	13	④ ⑤ ⑥	茶灰色 } 細粒砂・植物片混入 下部ではシルト層に漸移
			⑦	植物片多量混入
		29	⑧ ⑨ ⑩ ⑪	暗灰色 粘土 植物片混入
-1.5m ▶	VII	a	⑫ ⑬	灰白色 シルト
		b	⑭ ⑮ ⑯	暗褐色 粘土 未分解植物片多量混入
-1.8m ▶	Ⅷ層	18+	⑰	暗灰色 シルト混り 中粒砂

また各地層は、下位よりそれぞれⅣ・Ⅴ層が弥生時代前期、Ⅵ層が弥生時代中期、Ⅶ層が弥生時代後期の土器包含層である。

2. 分析方法

ここでは、藤原^(註1)(1982)に従い、ガラス・ビーズ法によるプラント・オパール定量分析法を用いた。その方法を第2図に示す。

検鏡は1試料につき1プレパラートとした。そして10スポットを任意選択し、その中のガラスビーズとプラント・オパールの検出数から、イネ、ヨシ、タケ類の各乾物重を算出した。

3. 分析結果

分析結果は第3図に示すとおりである。以下、下位の層準よりその特徴を述べる。

まずⅣおよびⅤ層(試料番号№12~18、以下同様)においては、*O. sativa*(栽培イネ、以下同様)のプラント・オパールは認められず、タケ類とヨシ(№16)が僅少な出現を示すにすぎない。このタケ類の出現傾向は上位層になるに従い減少し、Ⅵ層(№12, 13)ではわずかに検出されるのみである。

*O. sativa*は、Ⅵ層下部(№10, 11)になってようやく認められる。また同層は、№7~10においてヨシの高出現に特徴づけられるが、こうしたヨシの出現傾向の集中は、同層に限られる現象である。また上位のⅦ・B層(№4, 5)になると、ヨシにかわってタケ類が優占する。それとともに、Ⅶ・B層とⅥ層の境界の試料№6からは、イネ穀にして約0.9トン/10a・cmを越える*O. sativa*が検出された。Ⅶ・A層下部(№3)になるとタケ類が減少する一方、同層上部(№2)では、*O. sativa*はふたたび増加し、イネ穀にして約0.8トン/10a・cmの生産量となる。さらにⅦ・A層(№1)では、同じく約0.6トン/10a・cmの生産量が算出された。

4. 考察

次に、プラント・オパールの分析結果から、当遺跡における環境の変化と稲作の様相について検討を加える。なお稲作の様式は、当遺跡およびその周辺の環境から水田作が想定されよう。

当遺跡は、ヨシとタケ類の増減傾向から、低湿な環境(№7~10)、そしてそれに続く比較的高燥な土地条件(№4~6)のもとにあったことがうかがえる。その時期は、前者が弥生時代中期、後者が弥生時代後期である。№4~6にあたるⅦ・B層は、自然堤防状微高地の構成層であることから、同層におけるタケ類の増加は、細粒砂層の堆積に伴う自然堤防状微高地の形成に起因するものと思われる。

こうした環境変化のなかで、当遺跡の分析結果は、少なくとも4期の稲作農耕の可能性を示唆している。すなわち、№10, 6, 2, 1の各層準がそれである。それらの時期は、№10が弥生時代中期、№6および№2が弥生時代後期、そして№1が弥生時代後期およびそれ以降である。まず№10の結果であるが、それは稲作農耕を積極的に肯定するものとは言い難い。従ってここでは、*O. sativa*の供給源を周辺地域に求めるという解釈にとどめておきたい。№11はその落ち込みと解される。当遺跡において、本格的な稲作農耕が営まれたのは、№6の層準になってからのことで

あろう。ところが、同層準における稲の栽培は、一時的なものであったと思われる。そしてその後の自然堤防状微高地の形成に伴い、当時の水田は埋積されることになる。№7はその落ち込みと考えられる。さらに、Ⅱ・A層上部(№2)、Ⅱ・A層中部(№1)においても、稲作の痕跡を示す生産量に相当する*O. sativa*が検出されている。両者の生産量から判断する限り、№2の結果は上層からの落ち込みとは考え難く、各層準において稲作が営まれたとするのが自然であろう。弥生時代後期およびそれ以降に比定されるⅡ・A層上部は、細粒砂層で構成されている。その層相から、比較的高湿な環境における稲の栽培が推定可能であるが、同様の結果は、兵庫県志知川^(註4)神田南遺跡においても認められている。すなわち、古墳時代において、水田域は後背湿地から自然堤防状微高地に拡がり、そこでは水田開発が空間的に拡大したことが指摘されている。こうした現象は、当遺跡においても十分に考えられよう。

ところで、かかるプラント・オパール分析の結果に対して、考古学の成果では稲作農耕を実証する遺物、遺構の検出はなく、両者の見解に相違がみられる。すなわち、分析の結果、水田層と推定したⅡ・A層(№1)、Ⅱ・A層中部(№2)、Ⅱ・B層とⅠ層の境界(№6)における農耕具および水田址の検出は皆無である。従って、検出された*O. sativa*は、その供給源を周辺地域に求めなければならない。この点については、当遺跡およびその周辺における当時の環境を充分に把握した上で判断しなければならず、ここでは水田層推定の可能性を指摘するにとどめておきたい。

付記

本稿作成にあたり、宮崎大学農学部藤原宏志先生に終始御指導を賜りました。ここに厚く御礼申し上げますとともに、分析の機会をお与えいただきました御厚意に深く感謝いたします。また、同大学院生杉山真二氏には、実験に際し適切な御助言と多大な御協力を得ました。さらに、現地におきましては、財団法人大塚文化財センター瓜生堂分室の尾上実氏、村上年生氏に御教示を賜りました。末筆ながらこれらの方々へ感謝の意を表します。

注1) 藤原宏志(1976)プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)——数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法——考古学と自然科学 №9 p.15~29

藤原宏志(1976)古代土器胎土に含まれるプラント・オパールの検出 考古学ジャーナル №125 p.6~10

注2) 藤原宏志(1974)「野方中原遺跡土壌の plant opal 分析」福岡市教育委員会『野方中原遺跡調査概報』福岡市埋蔵文化財調査報告書 №30 p.50~51

藤原宏志・佐々木章・末吉孝行(1975) 熊本・上ノ原遺跡(縄文晩期初頭)土壌の plant opal 分析 日本作物学会九州支部会報 №42 p.49~53

森浩一・藤原宏志(1975) Plant Opal 分析による窯壁中のスズ材の推定 古代化学研究 №75 p.28~33

注3) 藤原宏志 (1982) 「兵庫・志知川沖田南遺跡における古代水田跡の探索」兵庫県教育委員会 『淡路・志知川沖田南遺跡Ⅱ — 昭和56年度発掘調査概報 —』 p. 62

注4) 高橋学 (1982) 「志知川沖田南遺跡の地形環境Ⅱ」 前掲3 p. 39

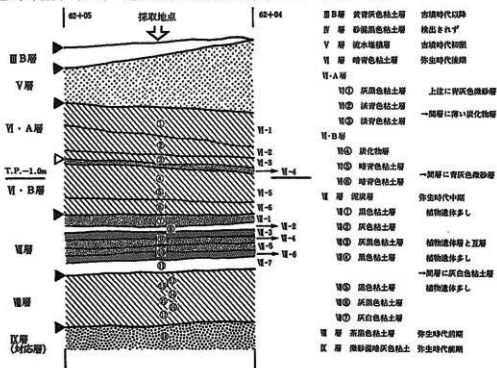


図1 12B トレンチ西壁層序図

サンプリング	(180 cc 採土管)
絶乾・重量測定	— 仮比重
ガラス・ピース混入	(約1gの試料に約0.03g)
超音波による分散	
ストークス法	(細粒物質の除去)
乾燥	燥
オイキット液注入	
プレパレーション	(散前をスライド・ガラスに展開)
検鏡・計数	

図2 ガラス・ピース法



図3 12B西壁におけるイネ科植物生産量

圖 版



調査地全景（南から）



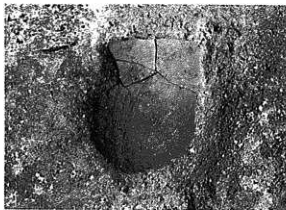
調査地 13B~15B 全景（北から）



機械掘削風景

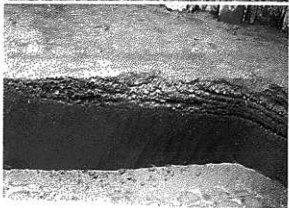
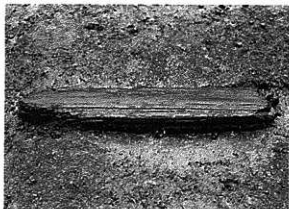


人力掘削風景



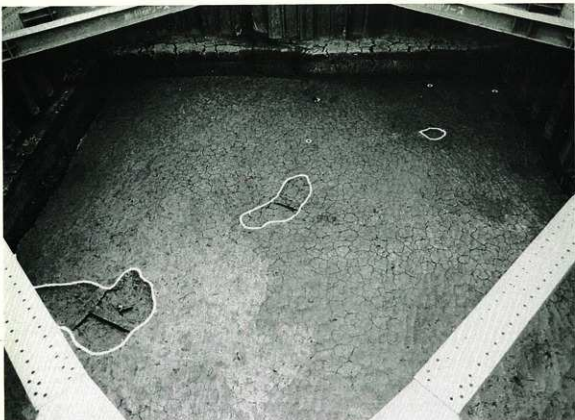
7 A トレンチ 縄文土器出土状況 001
006

001
002

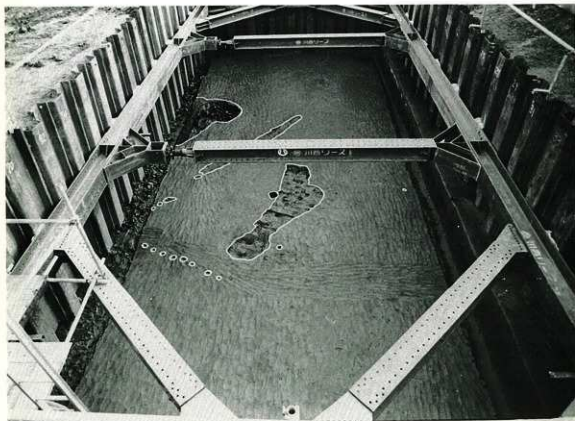


7 A トレンチ 木器出土状況
9 A トレンチ シジミ検出状況 (北西から)

9 A トレンチ シジミ検出状況 (南東から)
9 A トレンチ シジミ検出状況 (北東から)



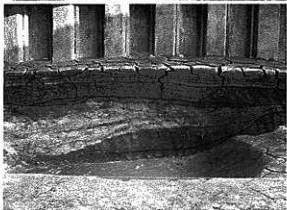
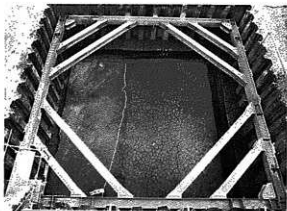
9Bトレンチ 遺構面



13Bトレンチ 遺構面



10Bトレンチ 遺構面



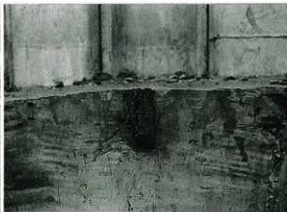
11Bトレンチ 検出状況
11Bトレンチ 自然河川・東西セクション



11Bトレンチ 自然河川・川床面足跡
12Bトレンチ 筋掘り・南北セクション



9Bトレンチ 筋掘り・カニ穴検出状況

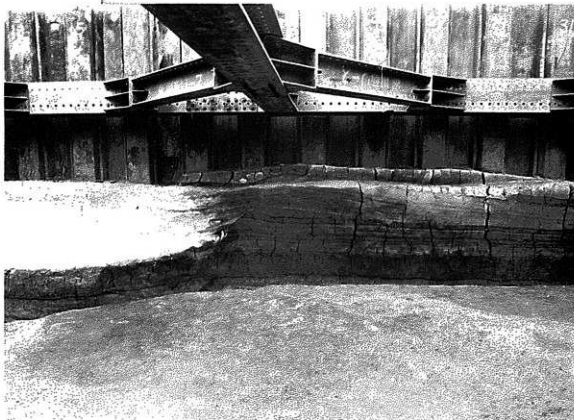


15Bトレンチ 杭跡

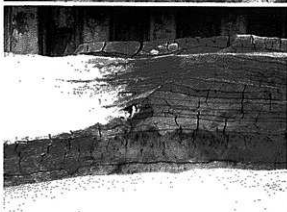
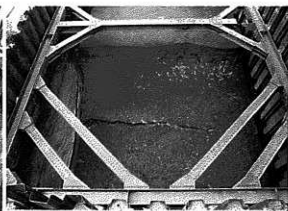
13Bトレンチ 落ち込み4遺物出土状況

15Bトレンチ 杭跡

11Bトレンチ 土器出土状況

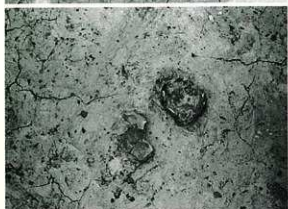


12Bトレンチ 自然河川と自然堤防



12Bトレンチ 自然河川検出状況 (南から)
12Bトレンチ 自然河川北肩部

12Bトレンチ 自然河川掘削後 (南から)
12Bトレンチ 自然河川 南北セクション



12Bトレンチ 遺物出土状況

12Bトレンチ 遺物出土状況

12Bトレンチ 遺物出土状況 (左上の拡大)

10Bトレンチ 遺物出土状況

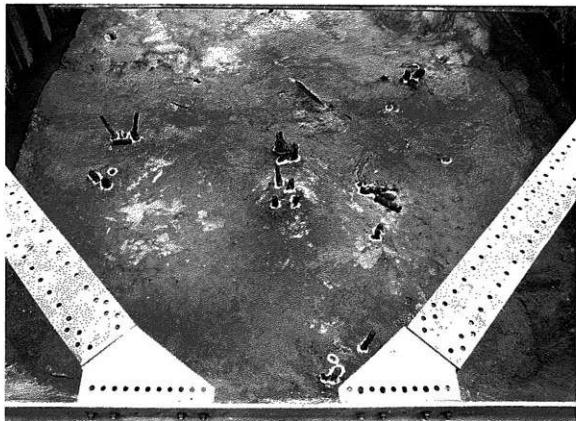


12Bトレンチ 遺物出土状況

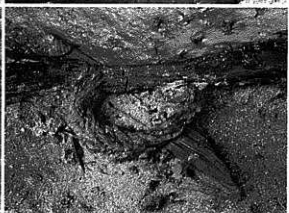
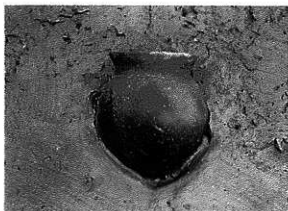
12Bトレンチ 遺物出土状況

12Bトレンチ 遺物出土状況

12Bトレンチ 遺物出土状況

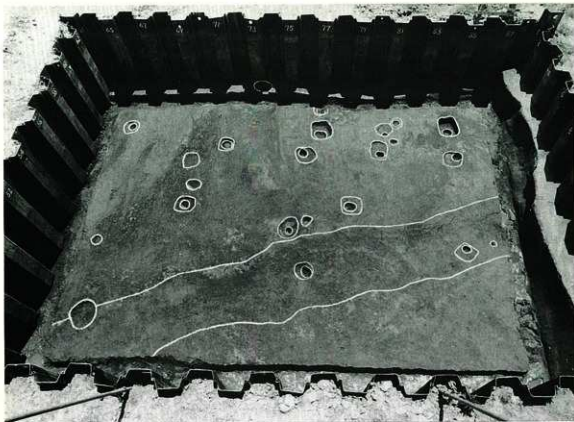


8 A トレンチ 立木検出状況



13B トレンチ 遺物出土状況
9 A トレンチ 遺物出土状況

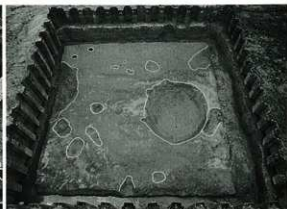
13B トレンチ 遺物出土状況
10B トレンチ 遺物出土状況



9Aトレンチ 遺構面(北から)



7Aトレンチ 遺構面(南から)



9Bトレンチ 遺構面(北から)



11Bトレンチ 遺構面(北から)



14Bトレンチ 遺構面(北から)



13Bトレンチ 遺構面

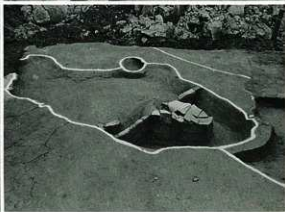
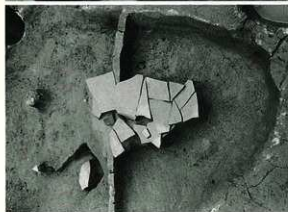
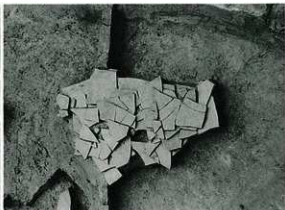
13Bトレンチ 溝9遺物出土状況

13Bトレンチ 溝10遺物出土状況

13Bトレンチ 土坑12遺物出土状況

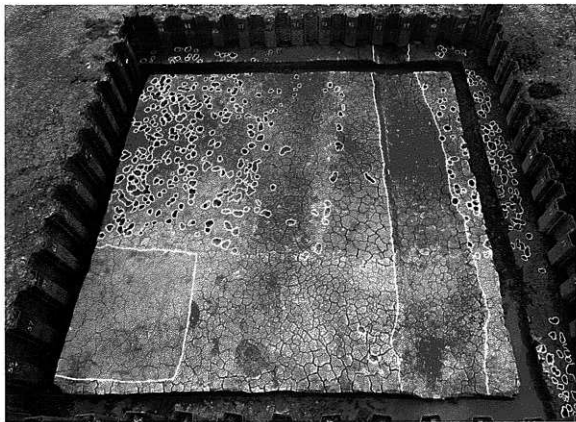


13Bトレンチ 土坑16遺物出土状況

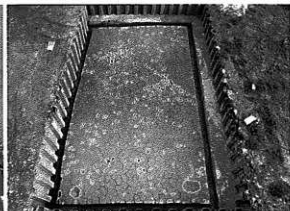


13Bトレンチ 土坑16遺物出土状況
13Bトレンチ 土坑16遺物出土状況

13Bトレンチ 土坑16遺物出土状況
13Bトレンチ 土坑16遺物出土状況

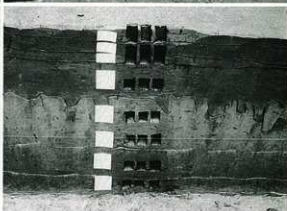
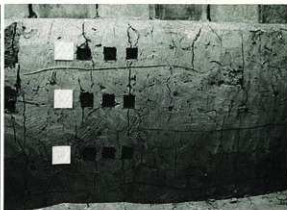


9Bトレンチ 遺構面



13Bトレンチ 遺構面 (道状遺構)
10Bトレンチ 遺構面

7Aトレンチ 遺構面
10Bトレンチ 遺構面

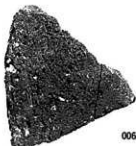
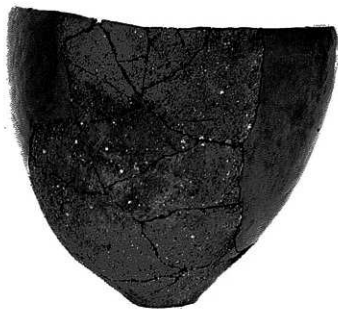


7Cトレンチ 断層
8Cトレンチ 断層

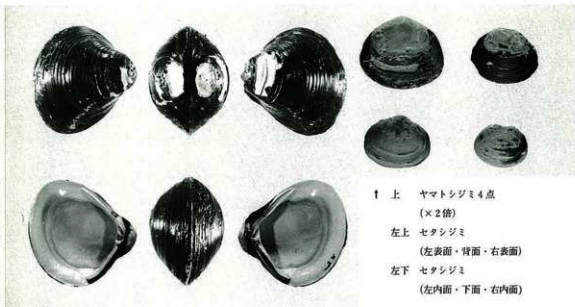
7Cトレンチ 土壌分析サンプリング
7Cトレンチ 土壌分析サンプリング



調査風景



7 A XI層上面 001~006, W01 用途不明木製品 (3/5)



↑ 上 ヤマトシジミ4点
(×2倍)
左上 セタシジミ
(左表面・背面・右表面)
左下 セタシジミ
(左内面・下面・右内面)

縄文時代晩期 貝



011



012



017



013



021

020



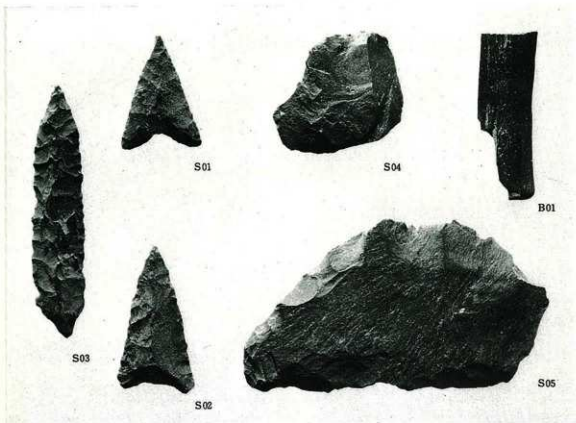
026

024

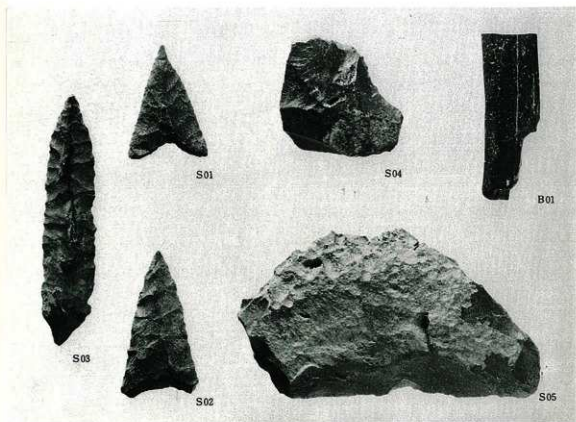


030

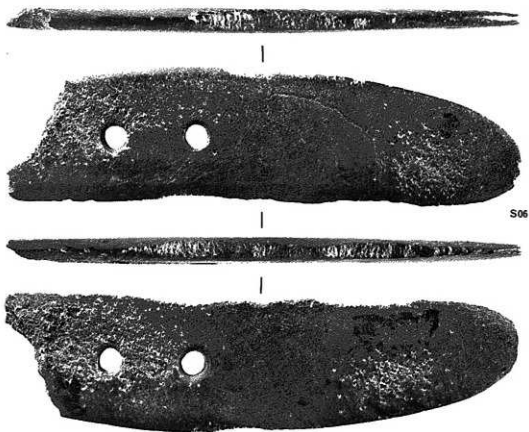
033



石器



S01~03 石鏃 (3%), S04・05 不定形刃器 (3%), B01 骨製品 (3%)



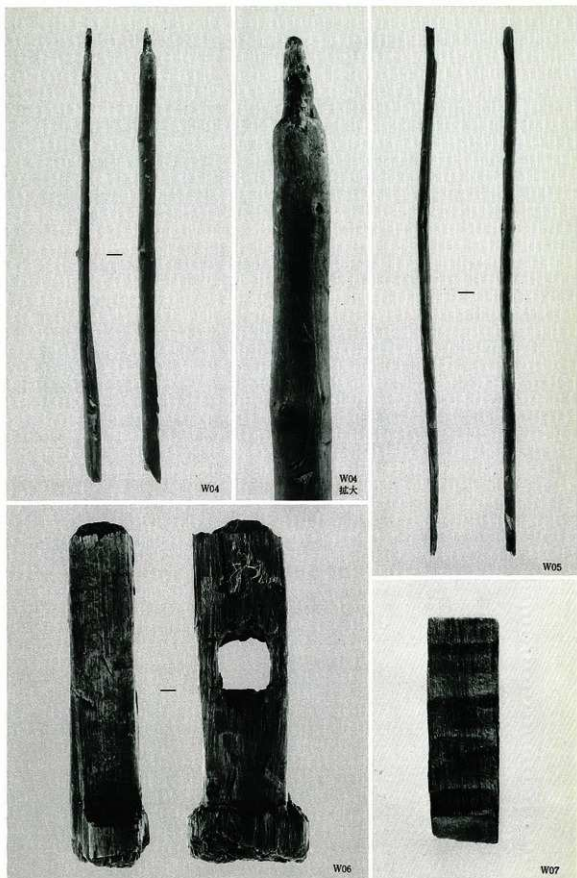
W02

W03

T01

T02

S06 石庖丁 (1/2), W02・W03 木梳 (3/4), T01・T02 土製円板 (3/4)



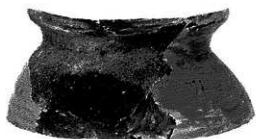
W04 木弓 (3/6), W05 木弓 (3/6), W06 用途不明木製品 (3/6), W07 加工木片 (3/6)
前期 W04~06, 中期 W07



038



039



037



043



051



050



045



046



047



048



049



1



—

W08

W10



W09



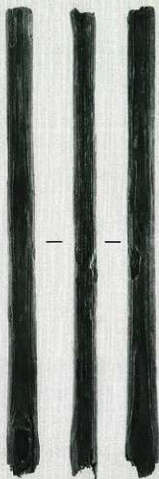
—

W11

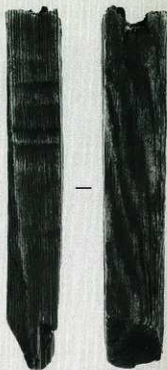
W08 小型方形盤 (㊦), W09 木製高杯 (㊦), W10 布巻具 (㊦), W11 琴状木製品 (㊦)



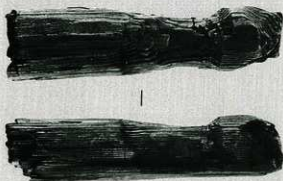
W12



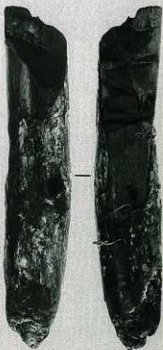
W14



W15



W13



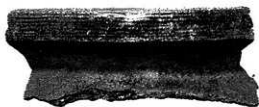
W16

W12・W13 有頭棒 (3/6), W14 丸棒 (3/6), W15 角材 (3/6), W16 木杵 (3/6)



W17

弥生時代後期 W17 木槽 (36)



053



054



055

古墳時代初頭 14B V層 053, 9 B V層 054, 13B V層 055



|



W18



W19

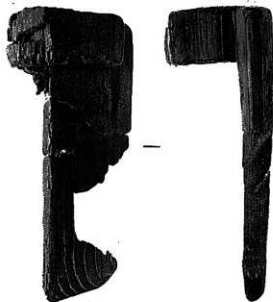
|



W19



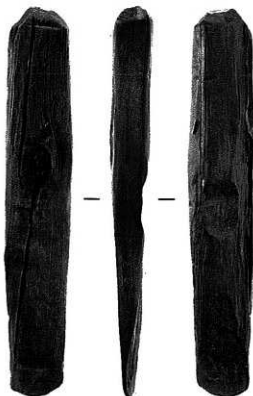
W20



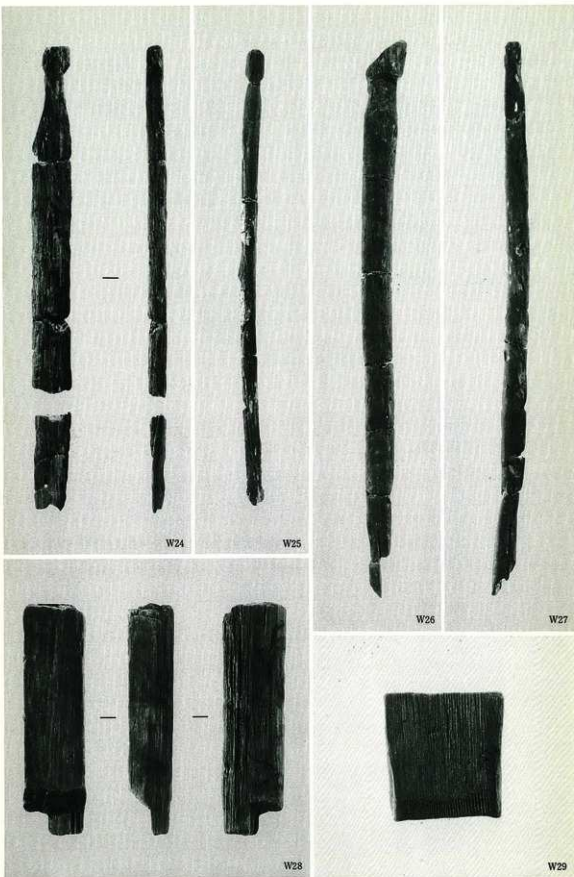
W22



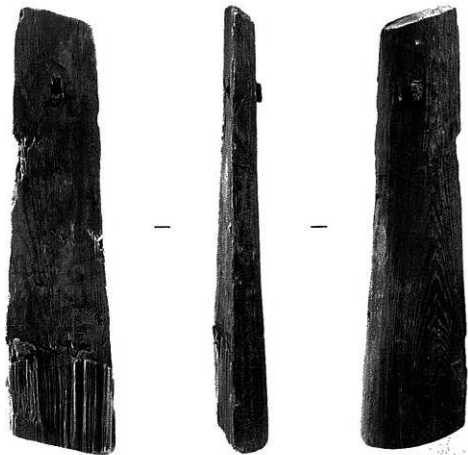
W21



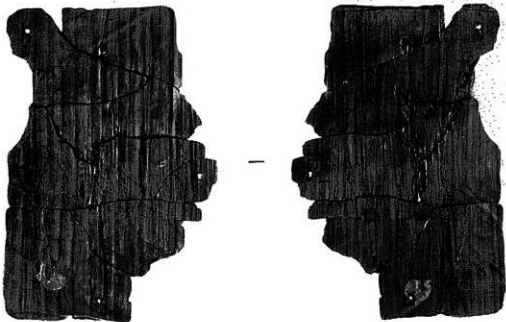
W23



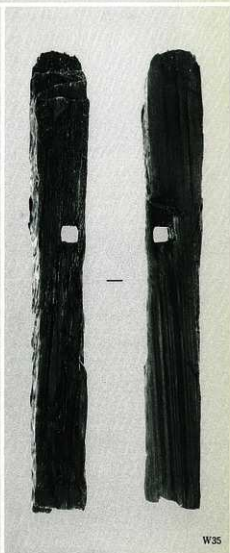
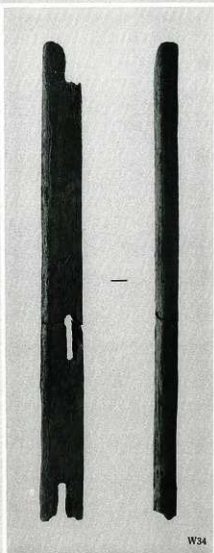
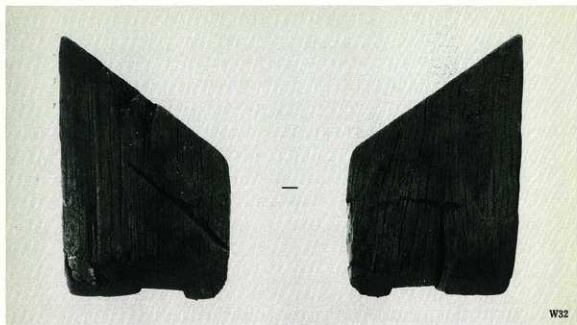
W24 有頭棒 (3/6), W25 有頭棒 (3/6), W26 - W27 有頭棒 (3/4), W28 用途不明木製品 (3/6)
W29 加工木片 (3/4)



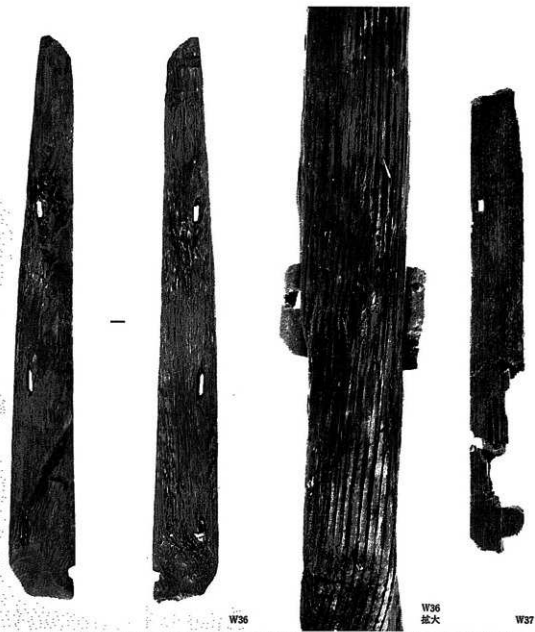
W30



W31



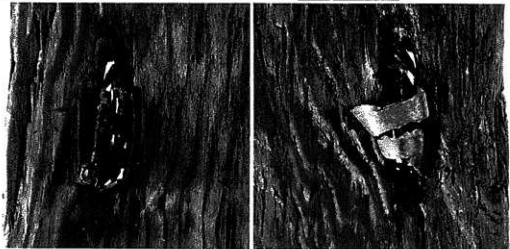
W32 板材 (3/4), W33 板材 (3/4), W34 板材 (3/4), W35 板材 (3/4)



W36

W36
拡大

W37



W36
拡大

W36 板材 (34), W37 板材 (36)



060



073



062



077



063



079



064



080



082



084



085



086



087



089



090



091



093



094



095



097



098



100



109



104



137



T03



132

